
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Nコード】

N0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時は二ト、またある時は宮殿の主になったりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。小説を書くのが初めてで、書き方・内容が拙いですが、どうぞよろしく願います。

潤「仕事したり闘ったりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃…チクショウ、目から汗がとまらねえ」

1 なんか、死にました(前書き)

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしくお願いします

では、はじめりはじまり〜

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。(『ウイスニルの予言』)

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真つ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真つ白い空間か？

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

……エエッ！！

まあ、落ち着きましようや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰って来る 夕飯を食べる 勉強、と思わせてラノベ 1
2時を過ぎたので寝る 目が覚める 今

ああ、もしかしなくてもこれ夢じゃ……

「夢じゃないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

……エエッ！！(本日2回目)

「な、なんだお前。ってかどこから出てきた！」

さつき俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かって俺は言った。

「私？私は転生の女神だよ？」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん！」

んな事言われたって…

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いいよ〜」

そう言くと女神（自称）は何やら小声でしゃべり始めた。
シ、シユールだ…

ボワツ

独り言を終えたららしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう？これで私が可哀想な子じゃないって分かったでしょ」

こんなの見せられたら

「お、おう。本当らしいな」

としか言えませんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、どうやらあなたは寝ている時に死んじやったらしいの」
ん？

「ちょ、ちよつと待て。え？俺死んだの？」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明〜！

つてか読めてきたぞ、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役と。

はいはいテンプレ乙

「その通り！あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じゃなくて決定事項かよ…つてか心を読むな。

「俺に拒否権は？」

「ない！」

デスよね〜。

「まあ、そのまま異世界つても可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ」

テンプレキター！

「じゃ、今のまま何も変えずにスタートして」

「良いの？反則的な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか」

「俺のミステリアスを返せ〜！！」

KY女神〜！！もう流行ってない？さいですか。因みに俺は今リアルorzになつている。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からないけど、ごめんなさい」

「はあ…まあいいや。で、2つ目は異世界でもお前と話が出るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもって訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ目は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おっ！いい事に気付いたね〜。あなたは反則的な能力がないから言語も学ばなければいけないところだったんだよ〜」

だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあったからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちよつと待った」

「何よ」

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ！！次の話ですればいいでしょ！！」

次の話って…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの！じゃ、気を取り直して〜異世界へしゅっ…」

「出発」
「……してやったり」

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。ってか絶対に俺の容姿とかわからないもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目いただきます

2 人物紹介

羽山 潤 はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に…ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

転生の女神 てんせいのめがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのようで…身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な…

バコーンッ!!

しばらくお待ちください

「え、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なってしまうたので、私、転生の女神が代わりに紹介します。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよね、潤君（ニコッ）」

「イ、イエス マム。何者かにであります!」

「よろしい。っと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちやいます」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの!潤君が飛ばされた異世界『ウエドリア』は剣と魔法がメインの世界です」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわゝ、やっぱり行きたくな〜」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさ〜逝ってきなよ」

「危ない世界なだけにシヤレになってね〜!!!」

「っと、また話が逸れちゃった。潤君がどうでもいいこと言うから」

「どうでもいいことじゃねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカッタネー」

「誰か助けて〜!!!」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどこかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そっちには居ないんであしからず」

「無視しやがった。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だね〜。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよ〜?笑っちゃうよね〜」

「俺の扱いひでえ!しかもまた逝こうになってるし…!」

「じゃ、いよいよ本編へレッツゴー!」

「開始早々に逝かないようにするんでよろしく願いします」

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやつと異世界か。ん？なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋ってたんだ？」

3 なんか、緑のものが…（前書き）

やっと異世界に到着

3 なんが、緑のものが…

「何なのこのテンプレ展開」

転生した瞬間、といつても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかというキツネ色の体毛を纏った狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃない？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。目を見る目を、丸いキュートな目とつり上がった獲物を狙う目だよ？どつちがかわいかなんて分かりきつてるじゃないか。同じネコ目イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけど…そう、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ？作者に至つては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ？」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！つてか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ」

「ミドリムシが現れた」

「何かデカイミドリムシきた〜！つてか変なテロップ流れた〜！」

ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあれがそうなのか分からないけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなのついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あ〜あ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張つてね〜」

KY女神はそう言う俺との交信を切った。クソッ、自分だけ作者の怒りから逃れやがった。

「はあ…しょうがないからやりますか」

そう俺が言うと、今まで律儀に待っていてくれた狼が一斉に向かっってきた。ミドリムシはその場で待機のようで…

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なっ！」

真っ正面から突っ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶をした。急所だからちよつとした力で気絶させられる。続いて狼その2が、俺が1匹倒して油断している所を狙ったのか、後ろから飛びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食らわす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやっぱり気絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟ったのか、逃亡した。相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空気となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、緑のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです（前書き）

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、ニヨロニヨロした鞭毛を持つユーグレナ目ユーグレナ科の生物。ちなみにユーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

……手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか」

俺がヤツに向かって走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。

「キモイっつゝの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなった鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎってもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かった。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあった石を拾って鞭毛の届かない位置まで下がった。

「あれが本当にミドリムシだとしたら」

俺は石をヤツの核目掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのうち話すとして…

ゴスツという音がして、核の少し手前で止まる。ってかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやったのに…

シューッ

この音？そりゃあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やっぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合成みtainな植物っぽい事もできるんだよな」

正確には原生物って言って、動物でも植物でもない。中途半端な奴め。

「せっかく頭使って倒そうと思ったけど、弱点も見いだせないし手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」

という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦いが始まりまゝす。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いな。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

そんでもって拾った石を核に向かって連射
ズドドドドッと凄いい音を出しながら石はヤツの核に向かって飛んでいく。寸分変わらず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の1発として大きめの石をヤツの核に向かって全力で投げつけた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避けて…

ってな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じた。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあ、ヤツはとにかくキモかった。ってか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会わせ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな」

5 なんか、作者に嫌われた気がします(前書き)

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の悪意を倒して、今は広い平原ミッドランドの中を移動中（ちなみに元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで戦闘というシニールな画にはならなかった）。ってか広すぎじゃね！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…こつ何もないと方向が合ってるのかすら分かんね〜よ。

〜1時間後〜

「まだかよ〜そろそろ木の1本でも見えていい頃だろ〜」

〜2時間後〜

「……………」

〜3時間後〜

「作者アアアツッ！！こりゃ何の嫌がらせだあ！さっきから石ころとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いなんてレベルじゃねえぞ!？」

〜4時間後〜

「作者さんよ〜。このままだと予告で言ってた第1異世界人に会えずにこの話終わりそうだぞ〜?」

ガタン

「ん？何の音だ？つて、やっと風景動いた〜！うわ〜、前に進めるって素晴らしい!」

お〜、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし1人で喋ってても危ない人に

なっっちゃうから、こっからは心の中での呟きで。

森に入ってから空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかったので、今日は野宿することとなった。食事はしょうがないから木に実っていた果実らしきもので済ませた。

・・・そういえば今回って人と会うんじやなかったっけ？まあ、思ったより進まなかったから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじめ…

ヒュンッ

何かが俺の耳元を過ぎていった。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかった。

人と会ってそういう事〜！？

確かに第1異世界人だけでも、確かに盗賊じゃないなんて言うてなかったけれども！

俺がそんな事を思っていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」

と、盗賊1（仮）

「そうそう、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかなくても、あなたたちって盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？さつきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪ってきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさつきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言った瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどっかの木にぶつかって気絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時の間にか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもつ!!」

盗賊1(断定)は顔を真つ赤にして懐から大振りのナイフを取りだした。ちなみに顔を真つ赤にしてるのは恋する乙女的な感じじゃなく、怒り心頭つて方の…え?分かってる?さいですか。

顔を真つ赤にするつて言えばね、俺が中学2年生の時に…

「死ねや!」

盗賊1(断定)が俺に向かって手に持っているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…昼に出会った狼たちよりせつかちだな。しょうがない、サクツと終わらせませうか。

「舐めた真似しやがつて」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今まさに俺の命を刈り取るうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。

「そんなもん振り回して危ないですよつと」

そう言つて俺は振り下ろされたナイフを避け、盗賊1(断定)に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1(断定)は倒れ始め、俺は盗賊1(断定)の鳩尾目掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1(断定)は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ、終わったな」

そう言つて俺は盗賊たちを放つておいて夜の森を後にした。眠気?命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだった」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君です え〜つと、次回はいよいよ街に入るのか？ つかろくなもん食ってないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち鬱陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてるよ〜」

6 なんか、いい人みたいです（前書き）

潤はニートにジョブチェンジした。

6 なんか、いい人みたいです

「はあ、やつと着いた」

俺は盗賊気絶させた後、さんざん歩き回って街道を見つけ、やつとの思いでどつかの街の前まで辿り着いた。詳しく説明しろって？ご冗談を、今は腹が減ってるんでそんな暇ありませんよ。

((ここはカラコルね))

KY女神もつい5分前に繋がった。何で括弧が変わったか？それはだなく、実は今までアイツは俺の頭の中に直接話し掛けてたんだ。んでもってその事をさつき知らされて、なら俺もできんじゃない？ってなって実際に出来ちゃったから、じゃあ声に出してないんだから括弧を変えなきゃっていうわけ。

((街の名前か?))

こんな感じで。

((そう。貿易都市で色んな物が手に入るんだよ?))

((へ)。でも俺金持ってないぞ))

盗賊から剥ぎ取ってくるべきだったかな…

((この街、っていうか殆どの街にはギルドっていう組織があつて、そこに加入すれば依頼の報酬としてお金が貰えるよ))

((なるほど。じゃ、早速行きますか))

一旦交信を切って俺は街の中へと入っていく。

しばらく歩いていくと、明らかに普通の住宅とは大きさも雰囲気も違う建物が目に入った。

「あれがギルドかあ。でかい建物だな」

入ってみたいことには始まらないと、その建物に足を踏み入れる。中はとても広かったが、ゴツイ男が沢山いて、どちらかというと狭苦しい感じがした。

カウンターには受付嬢、ではなく爽やかな男性が座っていた。テーションだただ下がりだ。

「すいませ〜ん。ギルドに加入したいんですけど〜」

テンション今なお下降中の俺。

「はいっギルドの加入ですね！こちらに身分証明書と経歴をお書き下さい！」

やたらテンション高い爽やか兄さん。

ん？身分証明書なんて持ってないぞ〜？

「身分証明書ってないとダメですかね」

ダメもとで聞いてみる。そして帰ってきた答えが

「ダメですね。もし犯罪者を加入させてしまうとギルドの信用に関わりますから」

というものだった。ま、何となく分かってただけど。

「身分証明書忘れちゃったんで出直して来ます」

という無難なことを言っただけでギルドを出た。

「さて、どうするか〜」

KY女神とはまた繋がらなくなったし…とりあえず仕事探すか〜

.....

仕事みつからね〜！！何でここの仕事は専門的なものばかりなんだよ！

おまけに商売始めようにもギルドに加入しなきゃ出来ないらしいし…ギルドなんて創った奴今すぐ出てこ〜い！

はあ、もう仕事しなくていいかな。俺は悪くない。社会が俺を受け入れてくれないだけなんだ。ハハハハハ。

「あんだこんな所で何してんの？邪魔なんだけど」

不意に俺の背後から声が聞こえた。振り返るとそこには…

いい感じで区切れそうだから今回はここまで。え？ダメ？さいですか。

作者からダメと言われたのでもうちよつと進めるよ。

俺の背後に立っていたのは、綺麗な夕焼け空をそのまま移したかのようなオレンジ色の髪をもち、自信に満ち溢れているようなやつり目の目も髪と同じオレンジ。容姿は上の上と言っても過言では無い。目測で身長160cm位の少女だった。だが、さっきの言動といい、この容姿といい、

「どこのツンデレですか？」

しまったアアアツ！！思わず口に出してしまった〜！

「はあ！？何訳わかんない事言ってるの？」

反応から察するに異世界にはツンデレという言葉は無いらしい。

が、機嫌を損ねてしまった。

「ゴメン。君があまりにも可愛かったからつい」

すると彼女は顔を真っ赤に染めて、

「か、可愛い！？な、何変な事言ってるのよ！」

と言ってきた。うん、ナイスツンデレ。

「ところでさあ、今日俺金も無くて泊まる所無いんだよ。1日だけ泊めてくれない？」

深刻な問題を忘れてた。って事でお泊まり交渉開始！

「ふ、ふざけないで！誰があんたなんか」

開始2秒でノックダウンされました。

「そ、そうか。残念だが他をあたるよ」

無理に泊めてもらうわけにはいかないからな。じゃ、今夜も野宿かな。

よっこらせ、と俺が立ち上がって街の外へ歩き出そうとすると、

「い、1日くらいなら、しょうがないから泊めてあげてもいいわよ」

さっきも言ったがもう一度言おう。

ナイスツンデレ

6 なんか、いい人みたいです（後書き）

次回予告

潤「何だあの前書きはアアア！俺は断じてニートじゃない！ニート
っていうのはだな、not in education、emp
loyment or trainingの略でだな・・・（長
いので省略）・・・だから俺はニートじゃない！さて、ではやっと
次回予告だな。次回はツンデレと仲良くなれば彼女の過去が明らか
に！全ては俺次第ってか。選択肢間違えないようにしないと」

7 なんか、真面目です（前書き）

何か纏まりの無い話になってしまった。

7 なんか、真面目です

「おじやましま〜す」

そう言っただけはツンデレさん（仮称）の家に連れてもらった。1人暮らしなのか生活感を感じさせる物はクローゼットとテーブルとイスくらいだった。キッチンはあるが料理はしないのかあまりにも綺麗だ…ってか未使用だろ〜。

「何突っ立ってんのよ。さっさとそこら辺に座りなさい」
では遠慮なく、とイスに座る俺。ツンデレさんも近くのイスに座る。

「ん？そういえば君って1人暮らしだよ？何でイスが2つも…はっ！もしかしてこれには今回の話のキーポイントなんじゃ…」

「何1人で暴走してんのよ？イスが2つあるのは、このテーブルを買ったときに付属品として付いてきたからよ」

バツカじゃないの、と言わんばかりに…

「バツカじゃないの？」

言われました。

「ごめんなさい…それにしても生活感の無い部屋だな〜」

女性にこんな事聞くのは失礼だと分かってはいるけど何か引っ掛かるものを感じたので聞いてみる。

「あ、あんたなんかに関係無いでしょ！」

やはり無理か…ってか一切デレを見せないってどういうこと？このままじゃせつかくのツンデレがツンツンになっちゃうぞ？

「悪かった。そうだ、まだお互いに自己紹介してなかったよな？」

「え？ええ、まだね」

自己紹介は大切だからな。お互いの印象アップの為にも。

「俺の名前は羽山 潤。出身とかは…知りたかったら教えるけど…？」

そう言っただけツンデレさんを見る。

「珍しい名前ね。話すことが嫌じゃないなら教えて。犯罪者だとこ
っちが困るし」

この世界って犯罪者が多いのか？ギルドでも言われたし…
だが何て言うべきか、いきなり異世界人ですなんて言っても信じ
てもらえないだろうし。

「羽山 潤って珍しい名前だろ？それは俺が他の世界から来たから
なんだ」

って事で正直に言うことにしました。

「何言ってるの！？確かにハヤマなんて名前は珍しいけど他の世界
なんて…ふざるのもいい加減にして！」

まあ、こうなりますわな。

「今は信じてもらえなくていい。あと、俺の名前は潤の方。羽山は
ファミリーネームだよ」

「ふくん、まあいいわ。言動は怪しいけど悪い人じゃなさそうだし
言動は怪しいけどって…ホントの事なんだけどな」

「そりゃどうも、じゃ今度は君の名前を教えてください」

「私？私はセレン。セレン・レイナンドよ」

「セレンね。セレンはギルドに入ってるの？」

今更だがセレンの腰には西洋の剣がさしてある。

「ああ、この剣を見て言ってるのね。いいえ、ギルドには入ってな
いわ。ただの護身用よ」

ふくん。日本じゃ剣なんて持ってたら即銃刀法違反で捕まるから
遠い存在だったけど、こっちじゃこんな一般的なのか？

「そういえば、セレンの髪の色って珍しいけど、それって地毛？」

元の世界にこんな髪の色の人がないのはもちろん、こっちの世
界でも赤、黄、緑、青の4種類しかいなかった。

そう言った瞬間、セレンの顔に影が差した。

これが今回の話のキーポイントになりそうだな。

「ええ、まあね」

と、さっきまででは想像もつかないほどその声は小さく、重かった。

そんな重苦しくなった空気の中、俺は思った。

あれ？俺ら（作者含む）が考えてた以上にシリアスだぞ。

何か聞いちゃいけない事だったか…その、すまん」

ここでふざけるのは少し違う気がするので素直に謝っておく。

「いいの。気にしないで」

・
・
・
・
・

気まず〜〜〜い！誰か助けて！ってかKY女神仕事入りすぎだろ！
繋がりにく過ぎるわっ！！

一体どこで選択肢間違えたんだ？あれ？ってか最初から選択肢の
コマンドが下に出てないぞ？まさかこれはギャルゲーじゃなかつ…

「ちよつと長くなるわよ？」

「はいっ？」

何のこと？選択肢のコマンドが出てない理由か？

「私の髪の色、珍しいって言ったでしょ？」

「あ、ああ」

そつちの話か〜

「私の髪はこのオレンジ色はね、この世界じゃ異端の色なの」

「異端？どうして？綺麗な色なのに」

「う、うるさい！黙って聞いてて！」

こんなシーンでツンデレ発動させなくても。

「人が生きていく上で欠かせない太陽が沈み、闇が人々を包み込む

直前の色。それは破滅の色と人々から恐れられてるの。それがこのオレンジ色よ」

「んなバカな」

髪の色なんてどうしようもないだろう。

「そんな事を教義としているのが、この世界の人口の9割以上が信仰している『シャイネン教』よ」

ドイツ語で『光る』か、如何にも闇が嫌いそうな名前だ。

「そうして私はこの16年間迫害され続けてきたの。どうっ？これであなたも私の事が嫌になったでしょ！？いいのよっ、もう慣れるか……」

「今まで、辛かったんだな」

そう言った俺は、いや、そうとしか言えなかった情けない俺はセレンの頭を撫でる。

「な、なにを……ふ、ふえ〜ん」

と、遂に限界がきたのか泣き出してしまった。

「泣くといいさ。その涙と一緒に今まで溜め込んできたもの全部流しちまえ」

そうして俺は彼女が泣き止むまで頭を撫で続けた。

7 なんか、真面目です（後書き）

次回予告

潤「珍しく真面目度の高い話だったな。こんなん読んでも面白くないっつゝの。次回は頼むよ？次回はどうやらセレンとお出掛けするらしいぞ？マジっすか？めっちゃ楽しみになってきた！」

8 なんか、旅に出ます（準備編）（前書き）

小説長文化計画実行中

中国語みたいです…

8 なんか、旅に出ます（準備編）

結局セレンが泣きやむ頃には夜になってしまい、夕飯を俺が（こ重要）作り、普通に寝た。自分で作ったとはいえ、調理したものがあんなに美味しいとは思わなかった。あの時はつい悲しくもないのに涙が出てしまったね。

で、今は俺が作った（ここにアンダーライン）朝食も終えてひと息ついているところだ。

「ところでジユンはいつ出発するの？」

「……はい？何のこと？」

「何惚けた顔してんのよ。ここで1泊したらまた旅に出るんじゃないの？」

そうだったっけ？ってか俺って旅してたんだっけ？いや、違うはずだ。そもそも俺はこっち（異世界）に飛ばされてこの街に流れ着いただけのはず。待てよ？人生という面においては俺は旅人だな。そう考えると俺はた：

「違ったの？酷く難しい顔してるけど。べ、別にジユンなんか居ても居なくても変わんないから居てくれてもいいのよ？」

顔を真っ赤にしながら提案してくる。おおっ！俺が考えてる間にセレンはツンデレレベルを上げていたらしい。だいたいツンデレだったぞ！

「マジっすか！？でもここにずっといるわけにはいかないからそろそろ行こうと思う」

そう言うとセレンはショボンとした顔になった。

分かりやすい表情だな

「で、提案なんだけど、セレン、お前も一緒に来ない？俺はこの世界についてよく知らないし、何よりお前と離れるのも寂しいしさ」

ホントのところはコイツをこのまま放っておけないからなんだけどな。

……あとボケとツツコミを1人2役やるのが大変という理由もあったりする。

「な、なに言ってるのよ！ま、まあ、そんなに言っんなら一緒に行ってあげないこともないけど」

とは言うものの、セレンの表情は喜色満面といった感じだった。

「じゃ、早速出発！と、いききたいところだけどお互いに準備もあるだろうから、出発は今日の正午。ギルド前で」

「分かったわ。じゃあ、またあとで」

今街の時計は10時15分を指している。

「さて、何を準備しようか」

まずは食料と思い、スーパーみたいな所に入る。こっちにもスーパーってあったんだね…

中は野菜や干し肉ばかり、ということではなく、冷凍食品とかインスタント食品、缶詰め、お惣菜までもが売られていた。

確かに旅には便利だけどさ、何かちがくね！？せっかくの異世界なのに普通すぎでしょ。おい作者、俺のこの気持ちどうしてくれる。

スーパーで水や、保存が効きそうな缶詰め・インスタント食品を買って、俺は図書館へと向かった。

上の段落だけ見たら俺が異世界にいるなんて誰も思わないだろうな。図書館へ向かった理由？それは異世界に来たら魔法を習得しないと。KY女神は前にこの世界には魔法があるって言ってたからな。

((あるよ))

((おおう、久しぶりに出たなKY女神。セレンに活躍の場を取られそうだから慌てて出てきたな？))

((違う違う。今日はあなたに連絡があって繋いだの))

((連絡？何？))

((今日から出張があつてさ、しばらくの間繋がらない所にいるから連絡は出来ないよ？))

((遂に作者がリストラを始めたか))

((リストラ違う！出張って言ったでしょ！居なくなるのは少しだけだよっ！))

((分かった。分かったから落ち着け。ところでさ、魔法って誰でも使えるの？))

((うん。魔力の量には個人差があるけど、基本的に誰でも使えるよ))

((ちなみに俺の魔力はどの位だ？そして増えることはあるのか？))

((あなたの魔力量は…平均的な魔術師くらい。一般人よりは高いかな。あと、魔力っていうのは身長みたいなもので、あなたくらいの年齢で魔力の増加は止まるんだよ))

((それだけ分かればいいや。じゃ出張頑張れよ))

((あ、ちょ、最後に読者の皆様に挨拶を…))

あつ、交信切っちゃった。ま、いつか。話してる内に図書館にも着いたし、早速入りますか。

図書館の中はギルド並に広くて壁には本がギツシリ詰まっていた。「これだけの図書館、元の世界じゃ見たことないぞ」

こりゃ探すのも大変だ。と思つていたら検索用のパソコンを見つけた。見つけてしまった。

夢壊しすぎだチクショーツ！！

まあ、便利なことには違いがないので、俺はパソコンで『魔法』と打ち込み、魔法に関するそれっぽいのを探す。

パソコンで調べた本を取ってみる。

『魔法のように相手を惹きつける10の方法』

はっ！つい自分の興味のある本を手にとってしまった。まさに魔法だ。

『初級者の魔法』

今度は真面目に取って来ました。

『第1章 まずは魔法について正しい知識をもとう。・・・』面倒くさいので読み飛ばす。

『第2章 じゃ次、魔力がなんなのかやってみようよ。・・・』さつき聞いたから読み飛ばす。ってかだんだん馴れ馴れしくなってるな。

『第3章 魔法を使う時の注意、は後で他の本読んで学んで』2行で終わったアアア！！後でこの本の著者に文句言ってる。

『最終章 簡単な魔法を使ってみよう！』これこれ、じゃ、早速学びますか。

『・サンダー 対象に雷を落とす魔法。』

使い方：適当に詠唱して雷のイメージが明確になったら「サンダー」と唱える。

・ファイヤー 対象を炎で燃やす魔法。

使い方：適当に詠唱して炎のイメージが明確になったら「ファイヤー」と唱える。

・アイス 対象を氷漬けにする魔法。

使い方：適当に…以下略

・ウィンド 細かい刃の風を起こす魔法。

使い方：適当に…以下略

・フォースグラビティ 重力をあやつり身体能力の強化、敵の

無力化に使用する上級魔法。

使い方：使用する場所の標高などから、大気圧、位置エネルギーを計算し、それに見合った重力を計算し、その計算結果以内の重力を対象の周囲1メートルの範囲で操作する。詠唱は「太古より流れたる大地の力、我の魔力を礎として今ここに具現せよ。（発動する場所の緯度経度を正確に言う）。フォーグラビティ」である。まあ、ファイト」

だそうだ。ってか突っ込みどころ満載過ぎだろコレエエツ！！
誰だよ著者。

『著者 誰かの何か』

作者アアアアア！！ふざけんじゃねえええええ！！だいたいお前はな、（しばらくお待ちください）なんだよ。ったく、気を付けてくれよ？

もうお別れの時間？じゃ、あの子の行動をサツと纏めますか。

あの子は中級魔法も習得して、上級魔法も思ったが、上級魔法は難し過ぎて分からなかったの、とりあえず図書館を後にした。その後俺は武器屋に行って武器を買って、ギルド前でツンデレと合流した。ここら辺はまた次の話で…

8 なんか、旅に出ます（準備編）（後書き）

次回予告

潤「何で俺が食料を買えたかって？そりゃセレンにお金を借りたからですよ。そつえば魔法覚えたよ魔法。どんなもんなのか今から楽しみだな。・・・忘れてた、次回は武器屋行ってギルド前でツンデレと合流して旅に出まゝす。って事で次回もよろしく」

9 なんか、旅に出ます(出発編)(前書き)

0 時に間に合わなかった…

9 なんか、旅に出ます（出発編）

「お待たせ」

予定の時間より15分早くギルド前に着いたが、そこには既に口
ーブをご丁寧にご飯まで被って着ているセレンが立っていた。

「遅いわよ！私なんか1時間前からずっと居たのよ！」

もう一度言うが俺は遅れたわけじゃない。ってか早いな！1時間
前って、今11時45分だから10時45分には居たのかよ。30
分で準備終わったのか。

「悪い悪い。待たせたついでにもうちよつと待ってくんない？」

「何よ、まだ準備終わってなかったの？」

「ちよつと約束があつてさ」

「まつたく、さつさとしてよね！」

「サンキュー」

さてさて、約束通りセレンと合流するまでの回想をしますか。

図書館を出て俺は武器屋へと入っていった。

カラコルという街は貿易都市と呼ばれるだけあって（6話にちよ
こつとだけ書いてある）武器の種類は豊富だ。

剣、鎌、槍、ロッド、ハンマーなどたくさんあった。

ちなみに俺は魔法で戦つていこうと思うのでロッド希望だ。前衛
後衛のバランスを考えてもセレンは明らかに前衛だからな…という
のは建て前で、ホントのところは怖いからだ。命の奪い合いなんて
元の世界じゃしたことないし、相手の命を奪うことに躊躇して殺さ
れるかもしれない。そんな前衛に少女であるセレンを出すのはどう
かと思うが、こつちの世界で戦つてきたセレンの方が俺より適任だ。

いずれは俺も最前線で仲間を守れるようになりたいが…

まあ、今こんな事を話してもしょうがない。

さて、この店にあるロットだが、

- ・天雷のロット（雷強化） 1万ワロ
- ・業火のロット（炎強化） 1万ワロ
- ・氷雪のロット（氷強化） 1万ワロ
- ・風斬のロット（風強化） 1万ワロ
- ・店先に落ちてたロット 1ワロ

が、主なロットだ。ちなみにワロというのはこの世界の貨幣で、スーパーで1000円で買えそうな缶詰めが10ワロだったから1ワロ10円と思ってくれて良さそうだ・・・もう突っ込んでいいよな？最後のって商品なの！？売る気ゼロだろ！

「すいませ〜ん」

俺が店員を呼ぶと、店の奥から若い男性が出てきた。

「どうしたつすか？」

口調軽いなこの人。

「この『店先に落ちてたロット』って何ですか？」

「ああ、それつすか？それは先週1日の仕事を終えて店をしまおうと店先に行ったら『持ち主を見つけてやってください』っていう張り紙と一緒に落ちてたんつすよ〜。で、一応誰かが持ち主になっ
てくれるように売ってるんすよ」

変わった人も居たもんだな〜

「へ〜、じゃあそれ俺が買ってもいいですか？」

1ワロだしな。損はしないだろ。

「へい、まいどあり〜。代金は1ワロつす」

1ワロス！？と、つい反応してしまった俺だがすぐにこの人の口癖と理解する。

「はい、1ワロス」

しまった〜！！そんな事考えてたらつい言っちゃまった〜！！

「？ ありがとうございます〜」

良かった。店員は無視してくれた。
さて、時間もちょうどいいし、ギルドに行きますか。

って感じでした。

「サンキュー、終わったぜ」

「終わったぜって、あんた何もしてなかったじゃない
変なの、と半眼で見られてしまった。

「さて、準備が整ったわけだが、どこに行こうか」

「え！？そんな事も決めてなかったの？ホント馬鹿ね！」

「ごめんなさい。じゃ、どっか静かな村みたいなのってある？
この街は人が多くて住むには落ち着かない。

「この辺りだったらキルファ村かな？カラコルから南東へ3時間
くらい歩いた所にあるわ」

「じゃそこにしますか。それではそれでは、出発〜！」

「ちよつと待った」

歩き出した俺の首ねっこを掴まれて立ち止まる。

「どしたの？」

「どしたの？じゃないわよ！まったく…街を出たらいつ魔物に遭
遇するか分からないのよ！？戦う時のこと考えないと」

ああ、そうか。今までは俺1人で戦ってたから全然気にしてなか
ったな。反省。

「俺はロッド持つてることから分かるように魔術師。後衛で応援、
もとい支援がメインだな」

いざとなったら前衛でも頑張るけど。

「ちよつど良かったわね。私は剣士で前衛タイプよ」

「じゃ、戦闘がはじまったら……」

と、打ち合わせをした。じゃ、今度こそ、
「行きますか」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（後書き）

次回予告

潤「いよいよ出発か。オラ、ワクワクすつぞ。ええっと、次回は俺とセレンによる初めての共同作業。だそうです。どうせ戦闘だろ？期待させて落っこつことは作者の常套手段だからな。みんなも気をつけるよ。」

10 なんか、相方が凄いです(前書き)

朝から何書いてんのかというツッコミについてはスルーの方向で…
学生は学校があるから早起きなんです

10 なんか、相方が凄いです

「どうも、この頃名字である羽山を使わなすぎて、「あれ？俺って何 潤だったっけ？」ってなり始めてる羽山 潤です。

「さてさて、今回はセレンと街を出て終わりました…では今、俺たちはどんな状況にいますでしょうか？」

「答えは簡単。ちっこいドラゴンだからつかいトカゲだか10匹くらいと戦闘中（初めての共同作業中）です。おつかしくな。前回の後書きで作者の意図を見破って戦闘フラグを回避したと思ったのに…」

「ジューン！何突っ立ってんの！？戦うわよ」

「だそうです。もう剣抜いてあるよ…やる気Maxだなセレン。」

「へーい。じゃ、後衛で大人しく応援してるよ」

「分かった。って、ちゃんと支援しなさいよ！」

「思わず後ろを振り返り俺を睨みつけるセレン。のりツッコミも出来るのか、優秀だな。」

「ってかトカゲ来てるぞ？前見ないと危ないんじゃない？しかしあのツンデレ剣士（略してつんけんなんてどうだろう？どうでもいい？さいますか）は背後に迫ったトカゲを」

「邪魔っ」

「と言って振り返りもせずには斬り伏せた。」

「ってか普通に強くな？俺いらなくな？」

「俺は今『いのちだいじに』って命令が下ってるから攻撃の行動がとれなくて」

「と、某ゲームの作戦名を出して動こうとしない俺。」

「何意味わかんないこと言ってるの？早く戦いなさいよっ！」

「トカゲを斬っては捨て、斬っては捨てを繰り返して残りを3匹にしたセレンが言う。もう戦闘にすらなっていない。」

「分かったよ」

って言った瞬間、空気を読んでかトカゲが1匹俺に向かってきた。そういうことで俺も戦闘に強制参加。

じゃ、折角だし魔法使ってみるか。まずは詠唱してイメージを高めるんだっけ？

「え、雷、電気、電池……」

と詠唱だか連想ゲームだかを始める俺。5くらい言ってもういいかと思いい、

「サンダー！」

って唱える。すると次の瞬間、天から敵に雷が……なんて都合のいい展開は待つておらず、俺とトカゲの間にビリッと静電気くらいの電気が流れた。

……よ、弱え。想像力が足りないっばいな。

でも今の静電気でトカゲは苛立ったようで、真っ直ぐ俺に突っ込んできた。それを俺は大上段に構えたロッドをトカゲの首目掛けて振り下ろし、首の骨を折って絶命させた。うん。結果オーライ。

さて、俺が1匹倒す間にセレンは残りの2匹を倒していて、初めての共同作業は無事終了した。

「ジュン、後衛なのに魔法が出来ないって……もしかして弱い？」

まあ、魔法使ったのも初めてだし元々前衛タイプだからな。とは言わずに、

「はい、こつちの世界に来て日が浅いもんで」

と言っておく。嘘ではないからな。とにかく非常時以外は後衛でのんびりしてたいし。

「ジュンの世界は平和だったのね。まあいいわ。しょうがないからジュンも私が守ってあげる」

ニヤニヤしながらそう言ってきた。セレンにしては珍しい表情だなとおもいつつ、断る理由もないってかむしろ大歓迎なので、

「よろしくお願いします」

とだけ言っておいた。

ちなみに今俺たちはカラコルから南東に2時間ほど進んだ所にい

る。つまりあと1時間ほど進むと村に着くのだ。今までに魔物はさつきの集団以外見かけていないので、この辺りに魔物は少ないのかセレンに聞いたところ、「そうね。街道が整備されてるから遭遇することはめったにないわ」らしい。

本題はここからだ。残りの道のりは街道の整備されていない森を行かなくてはならないらしい。当然魔物もうっじゃうっじゃ…今から気が重いぜ。

「じゃ、行きましょ」

という言葉が「じゃ、逝きましょ」に脳内変換されたのはしょうがない事だろう。うん。

「魔物に会わないように祈るときですか」

そう言い、俺たちは森の中へと入っていった。

10 なんか、相方が凄いです（後書き）

次回予告

潤「うわ〜今回は・・・森とか憂鬱だ〜。どう考えても戦闘があるでしょ。森林浴で終わるわけないもんね。何の嫌がらせだ作者。あと電車の中だからってコソコソとスマホ使って打つの止めろよ。次からは堂々と打つように！」

11 なんか、地面から出てきました(前書き)

魔法使っちゃいます。

11 なんか、地面から出てきました

やってきました。森の中。まだ日が出ているはずなのに中は薄暗い。虫もいっぱいいる。しかもジメジメしてる。うん、最悪だね。

「ま〜だ〜?」

セレンに聞く。

「まだよっ! うっさいわね!」

大分厳しい言い方: もつと優しくしてくれてもいいじゃん。ツンツンめっ。

「すぐに怒るなんてカルシウムが足りないんじゃないかい?」

牛乳嫌いな俺が言えたことじゃないけど。

「森に入ってから5分おき位に言われてれば誰だって苛立つわよ! ジュンの方が我慢が出来ないなんてカルシウムが足りないんじゃない? いい?」

言い返されてしまった: 読者の皆さんだって俺の方が正しいと思うでしょ? え、お前が悪いから謝れって? 俺が間違ってたの? そうだったのか?」

「セレン。脳内会議の結果、俺が悪いと分かったよ。悪かった」

そう言つとセレンは顔を赤く染めて、

「わ、分かればいいのよ。変なジュンね! . . . 私も言い過ぎた、ごめん」

と返した。最後の方はよく聞こえなかったが、俺の情報(もちろんラノベですが?) によると聞き直さない方がいいとなっているので無難に、

「お、おう。今度からは気を付ける」

と言っておいた。

こんなやりとりをしていたら森を抜けていた。うん、太陽って素晴らしい。あれ? そういえば1回も戦闘がなかったな。俺の予想の常に正反対を貫きやがって、作者の天の邪鬼め。

あとは平原を5分ほど歩けば、歩けば…

「何て村だっけ？」

誰にでもど忘れはあるよね。あくまでも忘れです。忘れてるわけではありません。大切な事なので2回言いました。

「キルファ村よ。300人位の人が住んでる小さな村。周囲を大きな川と森で囲まれているから基本的に自給自足で成り立っているわだそうです。」

「ありがとう。助かったよ」
するとセレンは顔をさつき以上に

真っ赤に染めて、

「ふ、ふん、常識よっ！ジュンも早く覚えてよね！」
と言って早足で前に進んでしまった。可愛いヤツめ。

俺は「善処する」と言って歩みを進めようとした。そう、進めよう(・・)とな。

(地面の下に何か居る！？)
咄嗟に気付いた俺はセレンにも声を掛けた。

「セレン！下から何か出てくるぞ！！！」

俺の言葉にセレンは、え？と反応をし、ヤツに気付いたのか走り出す。ダメだヤツの方が速い。

(ヤバイ、このままだと間に合わねえ)

何故か知らんが地面の下のヤツの狙いはセレンだ。しょうがねえ。
「安定する体勢になって剣の腹をこっちに向ける！」

セレンは有り難いことにすぐに行動に移してくれた。間に合うか…
「凍りやがれ！グランドアイスツ！吹き荒れる！テクノウインド！！！」

中級氷魔法を詠唱してセレンの足下やその周囲50メートルの地面を凍り漬けにする。その後詠唱したテクノウインドという中級風魔法を、セレンの剣の腹に1点集中させることで瞬間的に遠くまで滑らせる。

セレンが滑っていった直後、さっきまでセレンがいた場所の地面から氷を突き破って直径2メートル位のやたらでかい緑のワームがでてきた。

(なんとか間に合ったな。正直魔法に頼るのは賭けだったけど)

ちなみにさっき使った魔法。グランドアイスはアイスの1こ上の魔法で、地面を凍らせる範囲魔法。テクノウィンドはウィンドの1こ上の魔法で、対象に鎌鼬をぶつける技だ。今頃セレンの剣はボロボロだろう。後で謝れないと。ちよつと飛ばす方向間違えちゃってセレンが木にぶつかって気絶したのは俺と読者の皆さんとの秘密だ。くれぐれも作者にはれないようにな？

「デカブツめ。よくもセレンを吹っ飛ばしたな！覚悟しろよ？」
皆さん、頼むからそんな目で俺を見ないで。・・・新しい境地に目覚めちゃう。

グオオオオア！！

ワームが待ちかねて吠え出しちゃったよ。じゃ、冗談はここら辺にして、

「俺がセレンを気絶させたのをお前は見てたからな。悪いが口を滑らせないように殺させてもらっせ」

え？悪役になってるって？バカ言っちゃいけませんよ。俺は善良な一般ピーポウ(ネイティヴっぽく)ですよ。

って、また冗談始まつちやったよ。俺の意志は生卵よりも柔らかいな…ま、いっか、俺らしいし。

グオオオとワームがこっちに向かって突進してくる。ハッキリ言っつてめちやくちやキモいつすワームの兄さん…

さて、あれだけでかいと物理攻撃は効きそうにないな。魔力もまだ余裕があるから魔法で戦うか

あ、そうそう、気づいてる人も多いと思うけど、今回はここまで。後書きに俺が習得した魔法を載せとくから、それでも読んで予習しつつ次の投稿をお楽しみに！

どうした作者？え？魔法の説明に文字数使いそうだからここで次回予告とけって？ハイハイ、了解。

潤「次回予告なんて誰得なコーナーだよ、と最近思い始めている潤君です。次回は皆さんの想像通り、ワームとの戦いです。一刻も早く倒して俺の心の安寧を取り戻せ！」

11 なんか、地面から出てきました(後書き)

〈魔法一覧〉

《下級魔法》

- ・サンダー 対象に雷を落とす魔法、のほず。本編じゃ残念な結果に…
- ・ファイヤー 対象を燃やす魔法。外で料理するときに便利。
- ・アイス 対象を凍り漬けにする魔法。風邪を引いたときにも使えるぞ
- ・ウィンド 対象を細かい風で切り刻む魔法。キャベツの千切りにもってこい。

《中級魔法》

- ・サンダージャッジメント 10〜20個の雷球を対象の周りに浮かべ、任意のタイミングで一斉に雷球から雷が対象目掛けて飛んでくる。
- ・サンダーボイル スーザン・ボイルとは関係ない。サンダージャッジメントの派生系。10〜20個の雷球を1つ圧縮し、対象にぶつける魔法。
- ・ファイヤーウォール 別に何かのシステムの名前じゃない。炎の壁を作り出し、任意のタイミングで倒して対象を焼き尽くす。防御としても使える。
- ・ダークネスファイヤー ファイヤーウォールの派生系。炎自身をも焦がす温度の黒い炎を対象の地面から柱状に発生させる魔法。
- ・グラウンドアイス 対象の足下を中心に半径50メートルの地面を凍り漬けにする。
- ・ピアシングアイス グラウンドアイスの派生系。対象の足下を中心に半径30メートルの地面からドデカい氷柱を出現させる魔法。
- ・テクノウィンド 対象を鎌鼬で四方八方から切り刻む魔法。潤

君は頑張って1点集中させました。

・ ウインドバースト テクノウインドの派生系。自分を中心に半径10メートルに鎌鼬を起こす。これも防御にも使える。

・ デイザスタラスクエイク 対象の地面をひっくり返す魔法。農業に使えるかも。

12 なんか、シリアスです（前書き）

何か最終回みたいになりました。

12 なんか、シリアスです

さて、前は微妙なところで終わったから、ワームが突進している途中という気持ち悪い画からスタートする。

「ってか早いとこどうにかしないと喰われそうだ…」

「燃やし尽くせ！ファイヤーウォール」

俺の目の前に高さ10メートル横5メートルくらいの炎の壁が出来上がる。熱く感じないな。術者に対する安心設計か？

俺が付いたんだけどさ、下手に長い詠唱するよりもささと詠唱した方が上手くいくんだよね。たぶん俺の場合、ラノベとかゲームとかでこういうイメージは身近に有ったから、変に意識するとかえってイメージが霞んじやうんだろっね。

さて、そろそろ間合いに入ったな。

そう思い、俺は心の中で倒れろって念じた。

すると、炎の壁は俺の思い通り倒れ始めた。

「…こつち側に…って、ええええッ！？こつち側！？何でこんな時にギャグ発動してんだよ！ちよ、まっ、や、やべえ！」

と、俺はどうすることも出来ず、あたふたと慌てる。

どうするどうする、と考えるに考えて、俺はもう1つの防御にも使える魔法『ウインドバースト』を唱えることにした。

「我を守りし聖なる風よ！マジで頼みます！ウインドバースト」

ゴウツという音と共に俺の周りで風がうねった次の瞬間、凶悪なまでの風が周囲の草花とファイヤーウォールの炎を刈り取った。ワームも例外ではなく、動けはするものの、身体から体液が漏れ出してグロさ当社比2倍である。

…この魔法強過ぎだろ

そんなことを考えていたら、ワームがこっちに口を向けて何かそこそと行動していた。無傷で。

って、無傷ウウウ！？こっちの生物はミドリムシといいワームといい何でこんなに生命力が有り余ってんだよ！1発で倒せってか？いいぜ、やってやろうじゃないか。

と言っても使える魔法はあと2回が魔力の限界だな。

どうするか…と考えていると、こそこそしてたワームの口から変な液体が俺に向かって飛んできた。

テンプレだな。この手の攻撃は酸か毒で、触れるのはもちろん発生した気体を吸ってもアウトってパターンだろ？

「見え見えだぜ！」

と、軽く飛んできた液体を避ける。・・・移動した先に地面から出したワームの尻尾があると気付かずに。

俺はヤツのめちやくちや重い一撃を食らってしまった。チクシヨウ、こそこそしてたあの時か…

その後もヤツは俺で遊ぶかのように尻尾で俺を木に叩きつけたり、空中に放り投げて尻尾で叩き落としたりしていた。

「やつべ、身体が動かねえ…」

恐らくあばらが何本かいつてしまっただろう。内臓ももうポロポロだ。思えばこっちの世界に来て初めて怪我したな…

はあ、もうすぐ俺は死ぬのか…。思ったよりあっけなかったな…いや、まだあと1つやり残したことがあった。

「俺にはな…まだ死ぬわけにはいかねえ理由わけがあんだよ！！」

恐らくこの言葉はワームに対してじゃなくて自分自身に言いたいことだろう。

俺が死んだら誰がセレンをワームから、いやこの世界から守るってんだよ！

そう考え俺は自分の身体に鞭打って無理やり立ち上がる。

「デカブツ、今から俺の最大の一撃を叩き込んでやる。・・・かか

12 なんか、シリアスです（後書き）

次回予告

転生の女神「どうもどうも、久しぶりね〜。最近出れてなかったけど主人公が生死不明って事で今日は私が次回予告をしま〜す。ってかヤバかったね〜。潤君大丈夫かなあ？最終回にならなきゃいいけど…とりあえず次回は潤君が生きてた場合は潤君視点で何かするんじゃない？とにかく、次回を見てみないと分かんないわ〜」

13 なんか、生きてました(前書き)

潤は爆発すれば世の中平和になると思う

13 なんか、生きてました

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見当たらないから真っ白い空間か？

・・・あれ？この文章。それにこの空間。何か俺は知ってる気がするぞ？

「あつ、起きた〜？」

そこには、セレンではない見知った顔がいた。

「お前はKY女神！そうか、ここは転生する直前の空間だ〜」
でも何でここに居るんだ？

「転生の女神だけだね…あなたはワームと戦って死にかけてたから私が空間転移で運んで復活させたの」

ワーム、ワーム・・・はっ！

「セレンは？セレンは大丈夫だったのか？」

「復活して早々に彼女の心配とは、ニクいねコノコノ〜」

「そ、そんなんじゃないやねえよ！で、どうなんだよ？」

こんな時に顔を赤くするのはセレンのはずなのに何故か今俺は顔が熱い。きつと顔が赤くなってるんだろう。

「彼女なら無事だよ〜。誰かさんがいなくて泣いてたけどね〜」

KY女神がニヤニヤしながら言ってくる。

そうか、俺がいなくなっただことに泣いてくれたのか…申し訳ない気持ちもあるけど何か嬉しいな。

「で、そろそろ戻りたいんだけど」

「どっちの世界に？」

はい？どゆこと？

「今なら元の世界と異世界、どっちか好きな方に戻してあげ…」

「異世界だな。考えるまでもない」

俺がそう言っているとKY女神は意地の悪い笑みを浮かべて、

「異世界には未練をたつぷり残してきたんだね〜」

とか言いやがった。まあ、ホントのことなただけど。

「う、うるさいな〜、早く転移してくれよ」

「ハイハイ、あ、あとこれはアドバイスね〜。もっと強く、仲間を守るくらい強くなったら古の神々の神殿って所に行くといいよ〜。あなたの為になる何か置いてあるから」

「おう、サンキューな。お前は今まで会った女神の中で1番の女神だ」

「ホント？ありがとう〜。困ったら何時でも呼んでね〜」

女神なんてお前以外見たこともないが、嘘は吐いてない。嘘は。

「つて、お前呼んでもほとんど居ないだろっ!？」

転移が始まったのか俺の身体が薄くなってきた。

「嘘は吐いてない。嘘は」

コイツ…俺の考えまで読んでやがった。プライバシーの侵害で訴えてやるうかな。

そんなことを考えていたらいつの間にか異世界に着いていた。

「ここは…ワームと戦った場所か」

そこにワームの死体はもう無く、俺がウィンドバーストを使った痕だけがぼっかりと残っていた。

（（着いた〜？））

この声はKY女神か。

（（おう、着いたぞ。セレンはキルファ村に居るのか？））

今は一刻も早くセレンに会って安心させたい。

（（うん。村に居るよ〜））

（（分かった。じゃ切るぞ。・・・覗き見るじゃね〜ぞ））

くぎを差しとかないとやりかねないからな。

（（ソ、ソナノアタリマエジャナイ））

分かり易っ!!女神酷く分かり易っ!!

キルファ村に入ったとはいいが、セレンがどこにいるのか分からん…片っ端から行きますか。

村自体は広くないので1人目に尋ねてセレンがどこに居るかすぐに分かった。どうやら宿屋に居るらしい。

宿屋2階のセレンの部屋の前まで来た。第一声はどうしようか、セレンは怒ってないだろうか。そんな余計なことばかり頭に浮かぶ（しっかりしろ！羽山 潤！何を怖がってるんだ）

自分を叱咤激励して部屋へと入る。中にはイスに座ってどこか暗い表情で床を見つめていた。

「セ、セレンさくん？セレン？セレン？」

なかなか気付かずないな…

「セレンってば」

少し強めに言ってみる。

「？、！！」

あ、気付いた。セレンはまるで幽霊でも見たかのように口をパクパクさせている。いや、金魚にも似ているな…いやいや、よく考えてみれば口をパクパクさせるのはなにも金魚に限ったことじゃない。魚であればあの行動はみんなやっている。だとすれば魚のようにと言すべきか？いや、それは抽象的過ぎだろう…

おっと、セレンの心理戦で危うく思考の深みにはまるどころだった。セレン、恐ろしい娘っ！

「ジ、ジュン？」

あ、あれ？もしかして忘れられてる？いやいや、まだ数日しか経っていないはずだぞ？

「俺のこと、ご存知ですよ…ほら、数日前まで一緒に…」

「ジュン〜！！」

そう言っつて（叫んで？）セレンは俺に抱きついてきた。俺はビシクリしておもわず、

「は、はい。確かに潤は俺のですよ」

という変なことをいつてしまった…本当は「潤は俺の名前ですよ」
って言うはずだったのに。

「今まで何処行つてたのよ！バカッ！」

グハアッ、涙目＋上目遣いは反則！審判、早く反則とつてよ。こ
のままじゃ俺の心臓に良くない！

「と、とりあえず一旦離れて、お、落ち着こうじゃ、じゃないか」

まず俺が落ち着け！と思わず自分に突っ込んでしまったのは秘
密だ。

「っ！！ご、ごめんなさい。つい」

いいって、と言つて一回落ち着く。すーはー、すーはー。よし。

「今まで何処行つてたかだけど、友達に拉致られて、しばらく療養
してた。おかげですっかり元気になっちゃって」

ハハハ、と笑つて誤魔化す。それに対してセレンは「ふん。無
事ならいいわ」と言っていた。

その後、俺たちは気絶した後どうなったかそれぞれ話し、その日
は宿で寝た。か、勘違いしないでよね！ちゃんとお金は払ったんだ
からね！

うん、俺にツンデレの才能は無さそうだな…

13 なんか、生きてました（後書き）

次回予告

潤「次回予告に復帰したぜ〜！あと誰だ前書きにあんな事書いたの！？どうせ作者だろうけどな…さてさて、次回からは、またいつも通りの日常にもどります。俺はこれからキルファ村でなにをしてくのかな〜」

14 なんか、違法な気がします(前書き)

説明回です

14 なんか、違法な気がします

「さて、今日は何をしようか」

金が無くなってきたから働かなきゃいけないし、セレンの剣も買わなくちゃいけない。あと魔法の研究もしたいし…やるべきことに事欠かない。

「そう言うことはまずベッドから起きてきてから言いなさい」

セレンに「蹴されてしまった。だってベッド気持ちえ〜やん。

「俺はベッドから起きようとしてるんだ。けどベッドが俺を離したくないってきかなくて…」

「……………」

「……………」

「…………ハッ」

なんかあざ笑われたアツ！

「しょうがない、起きるか」

そう言っただけ布団を持って起き上が、ろうとして止まる。

「ど、どうしたの？」

体調でも悪いのかと、セレンが心配そうに言う。

「ベッドじゃない！」

「え、え？どうしたの？」

突然変なことを言い出した俺にセレンが一層混乱してる。

「だから、ベッドじゃなかったんだよ。セレン」

「何がよ？」

俺の真剣な表情を見てセレンも真剣な表情で聞き返す。

「本当に俺を離したくないのは…掛けぶ…」

スコーンツという音を伴って頭を叩かれる。まだ最後まで言っただけだったのに〜。

「私の心配を返しなさいよ〜！さっさと起きなさい！」

「分かったよ、お母さん」

「私はお母さんじゃないわよ！バツカじゃないの？」

そう言ってセレンは部屋を出て行ってしまった。

「・・・起きるか」

一人でやることもないので起きようとする。が、今度は本気で起きれない。この感覚、覚えがあるぞ。確かその時は周囲の風景が動かなかったんだが... ってことは

「作者アアアツ！お前か！面倒くさい事しやがって」

このままじゃ俺がまたふざけるようにしか見えないじゃねえか！いや、マジで、次はマジでヤバいから。ちゃんと異世界旅しますから〜！

作者様お願いします。

おっ、動けるようになった。さて、今後の方針も旅をするってことになっちゃったな〜。セレンに言ってくるか。

「ってことでまた旅に出ることになりました」

正直に話しました。作者からお告げがあったと、

「へ〜、作者がね〜。って、作者って何のことよ！ふざけてないでちゃんと方針考えて！」

だろうね。こんな反応だっけ分かってたさ。

「ホントなんだって〜。とりあえず適当に旅しようぜ。世界1周すれば作者も満足だろうしさ」

「世界1周って、どんだけ長い旅する気なのよ。まったく、まあ、いいわ。付き合っただけあげる」

なんとか了承してもらえた。

「でもその前に私の剣をどうにかしてね」

・・・そうでした。今セレンは武器持っていないだった。

「じゃ、そのための金をササツと稼ぎますか」

ってことでやってきました。ギルドです。

セレンは外ではローブを着てフードを深く被っている。大変なんだな…

ギルドに加入するために、前回の俺の失敗を生かして今回は秘密兵器を持ってきたぜ。

「すいませ〜ん、ギルドに加入したいんですけど〜」

この村のギルドの受付は可愛い女の子だったので、俺のモチベーションは上がりっぱなしなのはセレンには絶対に秘密だぞ。

「ではこちらに身分証明書と経歴を提出して下さい」

前回はここで失敗した訳だが、今回の俺は一味違っぜ！

「これですね。どうぞ」

そう言っただけ俺は2人分の身分証明書と経歴を出す。・・・偽物のな。

本来この世界では身分証明書は国から発行してもらうのだが、俺はカラコルの街のギルドで身分証明書の形状、デザインをこっそり覚えた。それなりに時間は掛かったがバレないようなものが出来たと思う。違法な気がするのは気のせいだろう。

「確か承りました。兄妹でのご登録ですね？お兄さんはウエル・カラーさん。妹さんがセラフィ・カラーさんでよろしいですか？」
セレンの了承も得ているのでなんら問題はない。

ちなみに俺の偽名ウエルは潤っているという意味のウエルシーからとり、セレンは天使のような美しさと気高さを持っているということだ。セラフィックからとった。

「はい。間違いありません」
偽名だけだね。

「ではギルド加入を承認します。ギルドの説明は必要ですか？」

俺はもちろんセレンもギルドには入っていないなかつたので知らないだろう。

「お願いします」

「了解しました。まずギルドについてですが、ご存知の通りギルド

はほとんどの街や村に存在しています。そしてこの…」

と言って受付の女の子は机の中からクレジットカード大のプラスチックつばいカードを出した。

「このギルドカードがあれば、どのギルドでも依頼が受けられます。逆に無くしてしまうと作り直しとなってしまうますから無くさないようにご注意ください。これはあなた方のギルドカードです」

そう言うと、彼女は俺たちにギルドカードなるものを渡した。

「次に依頼についてです。依頼にはE、Sランクまであり、D、Eが初級冒険者向け、Cが中級冒険者向け、A、Bが上級冒険者向けとなっています。あくまでもこれは目安ですので、初級冒険者が上級冒険者向けの依頼を受けることも出来ます。しかし依頼は失敗してしまうと違約金を払わなければなりません、下手すると命を落としかねないので、自分の身の丈に合った依頼を受けるようにしてください。あとSランクについてですが、Sランクの依頼はプロミネントギルダという、冒険者のトップ10に入らないと受けられません。プロミネントギルダになるには現在プロミネントギルダである人をギルド立ち会いの下で倒すことが条件です。ですがプロミネントギルダは実質世界最強の10人なので年老いるまでは無理だと言われています」

途中からそのなんちゃらギルダの話になっていますよお姉さん…
とりあえず俺はD、Eランクの依頼をやって稼げばいいんだな。

「最後に冒険者同士の共闘、パーティーについてですが、これは特にギルドに申請する必要はありません。パーティーに入るか入らないかは自由ですが、依頼達成時の報酬は変わらないので人数を多くするとその分1人あたりの報酬は少なくなります。以上がギルドについてですが、何か質問はありますか？」

パーティーはセレンと2人で組めば充分だろう。あとは…

「依頼の達成はどこで報告すればいいの？」

と、セレンが質問する。確かに、どうすればいいんだ？

「依頼を完遂したら、私たち受付の者に報告すれば依頼達成となり

ます。その時に魔物なら特定の部位、採集なら採集した物、配達なら領収書を提出していただきます」

なるほど、インチキは出来ないと。

「他に質問がないようでしたらこれにて説明を終了させていただきます」

セレンは？と顔を見るが、質問は無いのか首を横に振った。俺も特にないな。

「大丈夫そうです。ありがとうございました」

「はい。ご活躍をお祈りしています」

そうして俺たちは受付から離れた。

「さて、依頼を受けますか」

14 なんか、違法な気がします（後書き）

次回予告

潤「せっかくのんびりいこうと思ってたのに：作者の奴め、怨んでやる。さて、ギルドで説明も終わって次はいよいよ依頼を受けるぜ！って言っても簡単なのしか受ける気はないけどな」

15 なんか、反則的です(前書き)

殺すとは、そつらいじつと

15 なんか、反則的です

「依頼、依頼」と

俺たちは今、依頼が提示されている。掲示板の前で依頼を探している。

「これなんか良さそうじゃない？」

と、セレンが俺に依頼用紙を見せる。

《Dランク配達依頼》

キルファ村のギルドに預けてある小包をカラコルの街まで運んでほしい。

報酬：3000ワロ

注意：中身は割れ物なので、慎重に運んでほしい。中身が割れてしまったり傷ついてしまった場合報酬は減額。

「ん〜、確かにカラコルは1度行ってるから分かるけど…セレンは剣がないから戦えないし、この前みたいに魔物に襲われたら危ないんじゃない？」

「つてか久しぶりにワロって聞いたな…」

「それもそうね…じゃあこれは？」

《Eランク雑務依頼》

キルファ村の宿屋で模様替えをする。その手伝いをする。

報酬：1000ワロ

注意：おおきな物も動かすので力のある人をお願いします。人数は1人のみ。

「人数が1人までかあ、いい依頼だけだな」

まあ、あの宿屋小さかったし、人数が居ても邪魔なんだろう。

「ならお互い別々の依頼を受けない？その方が効率もいいし」

「そうだな。じゃあ俺は自宅警備員として部屋に……」

「ちゃんと働きなさい！」

言われてしまった。ちゃんとした仕事だと思っぞ？自宅警備員。

給料はもらえないけどな。

「へーい。じゃ、どの依頼を受けようかな」

「私はこの模様替えの依頼を受けるから、ジユンもちゃんと働きなさいよー！」

そう言い残してセレンは行ってしまった。

「さて、真面目に決めますか」

そう自分に言い聞かせて、改めて依頼を見る。

(そう言えば、ワームを倒したときのあの戦い方、あれが実用的かどうかやってみるか)

そう思って魔物の討伐依頼を見た。

《Dランク討伐依頼》

キルファ村の南西でビッグリザードを確認。これを討伐してほしい。

報酬：ビッグリザード1体につき500ワロ

証明部位：牙(2本1組とする)

注意：群れで行動するので周囲を警戒する。

写真があったので見てみると、キルファ村に来る途中に出会った

小さいドラゴンみたいなヤツだった。

ビッグリザードってことはトカゲだったのか…

何にせよ、そんなに強くない魔物だったので、この依頼を受けることにする。

「この依頼受けたいんですけど…」

受付まで依頼用紙を持っていく。

「ビッグリザード討伐ですね。お1人で行くんですか？」

「はい、そのつもりですけど…」

「相手は群れで行動する魔物です。よければ1人くらい一緒に行く仲間を探しましょうか？」

今回は自分の力を確かめるためでもあるので1人で行きたいところだなあ。

「今回はいいです。ご親切にどうも」

そう言うと、受付のお姉さんは心配そうな顔になるが、

「分かりました。頑張ってください」

と言ってくれた。

「じゃ、行ってきます」

と俺が言うと、

「はい。逝って…行ってらっしゃい」

と、言い直しながらも返してくれた。みんな、誤字には気を付けようね！

「あいつらか…」

そう言った俺の視線の先には件のトカゲがいた。30匹位…

多くねッ!? 前回セレンと戦った時は10匹位だったのに。予定変更。最初はあの黒い刀と身体能力強化だけで戦う予定だったけど、魔法で一旦数を減らそう。べ、別に自分の接近戦の力に自信がない

訳じゃないんだからね！うざい？ごめんなさい。

「さてと、出来るか分かんねえけど…俺の魅力に痺れなっ！！サンダージャツジメント！」

普段じゃ恥ずかしくて言えないようなセリフを1人なので恥ずかしくなく言える。

ちなみにこのサンダージャツジメントは普通のとはちょっと違う。普通は20個位の雷球を1体に集中させるのだが、今回は1個1個をビッグリザード1体毎に集中させた。おかげで制御が物凄い大変だ。

ビッグリザードも俺のことに気付いてこっちに向かってくる。

「さあ、いくぜ！」

と気合いを入れて、パチンと指を弾く。

バリバリッと音を立てて20個の雷球がそれぞれの標的に雷を放つ。初めて戦った時のような静電気ではないので、その一撃で20匹が絶命する。

「残り10匹！」

そう言っただけ魔力を身体に巡らせて身体能力強化をする。さらに右手に魔力を集中させて刀の形状をとらせる。

「さあ、いくぜ！」

と気合いを入れて…え？さっきと同じこと言ってる？そう堅いこと言わず。読んでやってんだから文章を工夫しろって？いやいや、咄嗟に出ちゃったんだからしょうがないでしょ！？そんな無茶振りされ…

グギャーッと、目の前にビッグリザードの牙が迫る。

「危ねっ…！」

間一髪のところまで避けて、後ろに跳んで距離をとる。

ほら、皆さんが邪魔するから危なかつたじゃん。次からは気をつけるよつた。

「ふっ…！」

と、脚に力を入れて強化された脚力でビッグリザードに迫り、刀

を一閃。その一撃でビッグリザードは胴体が2つにさよならした。身体が風のように軽い。俺は今、千でも何でもない風になっているようだフハハハハ。

そんな事を考えていると、残りのビッグリザードが全て俺に向かってくる。

「っはあっ!!」

と、魔力を刃に込めて薙ぐ。すると、魔力が刃となってビッグリザードたちに襲いかかり一瞬でその命を刈り取る。

・・・人に向けては使えないな。

何はともあれ、依頼は完了したので牙を取って帰ることにした。戦ってる時はそれどころではなかったけど、可哀想なことをしたな、と今更ながらに思う。俺もいつかはこんな感じで人を殺めてしまっただろうか、と少しブルーになりながらビッグリザードたちに手を合わせ、その場を後にする。

15 なんか、反則的です（後書き）

次回予告

潤「殺したものの分まで生きるのが俺の責任、か…ま、頑張りますか。さて、次回も引き続きギルドでお仕事だ。次はどんな依頼を受けようかな？。ん？何か新たな出会いの予感」

16 なんか、巻き込まれました(前書き)

ギャグ成分が…足りない

16 なんか、巻き込まれました

「依頼達成ですね。では証明部位を提出して下さい」

あの後俺は身体能力強化を掛けたまま村まで軽く走って帰った。1キロくらい離れた場所だったが、それを10秒程で帰れた。軽く走って時速360キロかよ…半端じゃないな。

ってか最近真面目な冒険っぽくなってるな…作者もギャグ成分が足りなくて萎びてきてるぜ。お前は植物かつ！

「あのお、どうされたんですか？」

作者のせいで、心配されちゃったじゃないか。え？責任転嫁だつて？ごめんなさい。

「すみません。これが証明部位の牙です」

そう言ってビッグリザードの牙を60本出す。

「これ全部1人でやったんですか！？」

お姉さんが信じられないような顔でこちらを見てくる。俺ってそんなに弱そうに見えるのかな…

「そうですね…何か問題でもありましたか？」

まさか、殺し過ぎで動物、いや今回は魔物か…魔物愛護団体に訴えられるとか？自分で言っていてなんだが、魔物愛護団体って良い人なんだか悪い人なんだか分からない団体だな。

「いえ、凄いな〜と思ひまして…魔物愛護団体が見たら発狂しそうですね」

居るんだっ！！魔物愛護団体ホントに居るんだっ！！

「ハハハハハ」

と、乾いた笑いしか出てこない。

「では依頼を達成しましたので報酬です。ビッグリザードの牙60本なので30匹分、15000ワロです」

どうぞ、とお姉さんがお金の入った袋を渡してくる。

ありがとうございます。と俺は言っただけで受付を離れた。今はちょうど1時だ。あ、午後の1時な。当たり前？さいですか。

「あと1つくらい依頼は受けられそうだな」

さっきの依頼も2時間くらいで終わったし。

というわけで掲示板前へ行きま…

「てめえ、何のつもりだ!!」

厄介事の香りが…でも野次馬根性が抑えられねえ。止まれっ、俺の両足!

「だからわたしは他人と共闘なんて無理って言ったの、もう付き纏わないで」

結局見に来ちゃった…それにしてもどうしたんだ?

ああ、読者の皆さんを置いていってしまったな。今俺の目の前ではゴツい男2人と、俺と同じ年くらいの灰色の髪をもつ少女(ロツド)を持っているから魔術師だろう)が言い争っていた。

「てめえが仲間を敵ごと魔法で怪我させたんじゃないか!何だその口のききかたは!!」

ふざけんじゃねえ!と、男は少女を殴ろうとする。

って冷静に実況してる場合じゃねえ!

「止めるよ。大の大人が暴力振り回してんじゃないやねえよ」

と、男と少女の間に入って男の拳を止める。

はあ、結局厄介事に首突っ込んだんじゃないよ。

「てめえには関係ねえだろ!?引つ込んでろ!」

と、男は俺の肩を強く押す。いや、押そうとする。しかし努力の結果虚しく俺はびくとも動かない。

これがこの男の本気だとしたら見かけ倒しもいいところだ。

「目の前で女の子が殴られそうなのに黙って見ていられる程腐っちゃいないんでね」

決まった!俺の言いたい言葉ランキング第3位の言葉を言えた
!)

表面上は何て事ない顔してるけど、内心はしゃぎまくりである。

「てめえ、表へ出る！」

え、俺これから依頼受けようと思ってたのに。時間無くなっちゃうじゃん。何で動いちゃったんだよ俺の足！

ってか最近厄介事に巻き込まれる率が半端じゃないんですけど…1回お被いしてもらおうかな、作者が俺に取り憑いてますって。危ない人だと思われること請け合いな。

「どうした？早く来い。今更謝ったところでもう遅いからな」

おっと、男が待ちくたびれて言ってくる。最近のすぐキレる若者って恐いつ。っていうか俺の行動の中に謝るような要素あったか？いや、無いはずだ。（反語）

そんな事を考えつつ男の後ろを歩いていく。

ギルドの中にいる者が騒ぎ立てる中、件の少女だけがどこか冷めた目でこれを見ていた。

16 なんか、巻き込まれました(後書き)

次回予告

潤「はあ、面倒くさいな」ホントに。今から次回が憂鬱だ。俺の運命の管理人(作者)は早いとこどうにかしないと。さて、サッサと男倒して冷めた少女の攻略といきますか」

17 なんか、冷たいです（前書き）

ジユン は ふたまた を しよう と している
ゆるします か？

・はい

・いいえ

・爆発しろ

17 なんか、冷たいです

俺は男に連れられて外に出た。

「さあ、死にたくなきゃ全力で来な！」

こんな所で全力なんて出せるわけねえだろ。ってか全力出したら本当に殺しちゃうかもしれないだろ。

「ハイハイ。じゃ、いくぞ」

と言つて俺は全身に魔力を巡らせる。もうお馴染みの身体能力強化だ。

「いい気迫だ。てめえ名前は何て言う？」

自己紹介してるような暇は無いんだけどな。まあ、いいや。

「じゅ、いやウエルだ。ウエル、ウエル、、ウエル・カーリー？いや、ウエル・カーラーだ」

やっちまったアアア！！本名言いそうになった上に偽名間違えたア！！何だよカーリーってネイティヴなカレーかっ！？

「？変な奴だな。カーリーは俺だ。アレン・カーリーだ」

カーリー居たアアア！！どんな偶然だツ！

「そ、そんな事よりサツサと終わらそう」

マジでお願い。これ以上ボロだす前に早く始めよ？

「生意気言いやがって。いくぜ！」

と、アレン、いや、カーリーが俺目掛けて突っ込んできた。

身体能力強化をした俺の目には止まって、は見えないけど。かなり遅く見える。じゃ、サクッと

「はい、終わりっつと」

俺はカーリーに一瞬で間合いを詰め、鳩尾に軽く一発叩き込んで意識を刈り取った。

カーリーと一緒にいた男は、カーリーが倒されたのを見るや否や逃げ

出してしまった。薄情な奴だ。

「さて」

ギルドに戻って少女の心を開かせるとしますか。

「よっ」

ギルドには彼女と受付のお姉さんしか居なかったのですぐに見つけられた。

「なんですか？」

おおっ、随分冷たい…こりやセレンの時より難しそうだな。

「変な奴に絡まれて大変だったな」

「今もあまり変わっていません」

え？それって俺の事？どうやら彼女の認識では今も変な奴（俺）に絡まれて大変な状況らしい。ああ、目から汗が出てきた。今日そんなに暑くないのに。

「そりゃどうも。ところで君の名前って何て言うの？」

とりあえず話題変更。

「何であなたに教えなくてはならないのですか？」

「君に興味があるってだけじゃだめか…」

「ダメです」

俺の恥ずかしさを堪えて出したキザなセリフがバツサリ切り捨てられたア！まだ言い切ってなかったのに…

「じゃ、俺の名前でも…」

「興味ありません」

そう言い残して彼女はギルドを出て行った。

まあ、今日1日で心開いてくれるとは思ってなかったけどね。

「ナンパに失敗してしまいましたね」

受付のお姉さんがニヤニヤしながら見てくる。

ヤメテッ！何か恥ずかしくなってきた！

その後何だかんだで夜の10時頃に俺は宿の部屋へと戻った。何してたかって？何だかんだだよ、何だかんだ。そこには既にセレンが帰ってきていた。

「遅かったわね」

そう言っただけを迎えてくれる。ちゃんと喋ってくれる女の子が居るっていいなあ。さっきとは別の種類の涙が…

「セレン〜！やっぱりお前が1番だ〜。俺にはお前しかいない」

そう言っただけでセレンに抱き付く。

「え、ちょ、な、何！？は、離れなさいよ。バカッ！」

顔を真っ赤にして言ってくる。

嫌そうな顔をしてないところから察するに…うん。久しぶりのツンデレだな。

「ゴメンゴメン。今日さ〜魔術師の女の子に声掛けたんだけど、冷たくあしらわれちゃってさ〜」

俺がそう言っただけでセレンは目に見えて不機嫌になって、

「バカッ！ジュンのバカ！バカジュン！もう知らない！」

と言っただけで自分の部屋に戻ってしまった。

やっぱり女の子の前で別の女の子の話題はタブーだったかな？

謝りに行くかどうかとも思ったが、もう時間も遅いので明日謝ることにして今日はもう寝ることにした。

17 なんか、冷たいです（後書き）

次回予告

潤「さあ、明日はやることがいっぱいどうぞ！セレンに謝って、あの娘の心を開いて、ギルドでお金稼いで…まあ、頑張りますか」

18 なんか、再戦するみたいです（前書き）

遅くなりました。

言い訳をするなら、他の作者さんの作品を読みました。

そっだ、私は悪くない。悪いのはあんな面白い作品を書く作者さんがいけな…すみませんでした。

18 なんか、再戦するみたいです

・・・朝になってしまった。昨日は明日の朝にでも考えればいいや、と思っていたのだが、どう謝っていいか分からぬ。

例えるならそう、テスト前日に明日の朝勉強すればいいや。と思つてその日の夜をゲームに費やしてしまい、次の日の朝に後悔するあの気持ちと相似である。ちなみにこれは作者談であり、俺も元の世界で何回かやらかした事でもある。

おつと、こんな事言つてる場合じゃないな…

案としては、早いとこ謝る。謝罪の意思表示の為に、謝ると共に贈り物をする。この2つが有力候補だな。紙に書いとくか。

うーん、早いとこ謝るを選ぶなら昨日の夜に謝るべきだったな。

そう思い早いとこ謝るにバツをする。

だとすると贈り物か…セレンには悪いけどこの件は俺が贈り物を買うまで先延ばしにしてもらおう。

そうして贈り物と書いた方にマルをして机の上に置いておく。

「さて」

謝らないのにセレンと会うのは気まずいな…今はまだ6時だけどギルドに行きますか。

『用があるから先に行つてる』という書き置きをドアに貼っておく。これで気付くだろう。

そうして俺は眠い身体を動かしてギルドへ向かった。

ギルドには朝だというのに人が結構いた。みんな仕事熱心だな。なんて感心してしまつたが、後で聞くと今ギルドにいる連中は家がなく、ギルドに入り浸つて1晩中酒を飲み続けているらしい。だからこんなに酒臭いのか。

「今日はどんな依頼を受けようかな？」

昨日の昼まではギルドにあまり乗り気じゃなかったくせに何で今はノリノリなのかって？そりゃ贈り物をするっていう目的があるからでしょ。昨日も剣を買って目的はあったけどほら、モチベーションの違いが、ね。

さて、依頼依頼

《Aランク討伐依頼》

キルファ村の東にあるシグト山にジーニアスワームが確認された。村に被害を及ぼす前にこれを討伐せよ。

報酬：30000フロ

証明部位：ジーニアスワームの触角

注意：見た目通りの凶悪なまでのパワーと見た目からは想像出来ない頭脳戦も使える魔物。パーティーを組まねば初級冒険者はもちろん上級冒険者も返り討ちに遭うだろう。

そこに載せてある写真は以前俺が死にかけた件のワームだった。あのデカブツ、そんなに強かったんだな。確かに俺も死にかけたけど。

この依頼はそこら辺の冒険者が受けると死者が出るかもしれないな。俺は昨日のカレーとの、違った、カーリーとの戦いで冒険者がどのくらいの強さか分かったが（今朝酔っぱらいから聞いたがカーリーはこの村では腕の立つ方らしい）、あの程度では戦いにすらならないだろう。

「俺がやるか」

という一種の責任感の下、この依頼を受けることにした。

「おはようございます。この依頼を受けたいんですけど」

受付まで依頼用紙を持って行った。

「おはようございます。依頼の受注ですね……この依頼を受けるんですか!?いくらビッグリザード30体を1人で殲滅したからって、この依頼は冒険者になっただばかりのあなたには無謀かと…あなたがやらなくてもこの村の中級冒険者がやってくれますよ。最近この近くに現れたジーニアスワームを倒した凄腕の持ち主も来てくれるかもしれませんし…」

その声はどこか絶望が混じっているように感じた。
「つかそのジーニアスワーム倒したの多分俺です。」

「来てくれなかった場合はどうなるんですか?」
「中級冒険者では多分無理でしょうし、国はこんな辺鄙な所にある村なんて放っておくでしょうから軍にも期待出来ません。村にジーニアスワームがやってきたらあきらめるしか無いでしょうね。」

国の軍つてのはそんなもんなのか…
だからさつき受付のお姉さんはどこか絶望したような感じだったんだな。しかしそんな事言つと、

「やっぱり俺が受けます。この村にはお世話になりましたし」
より一層この変な責任感が暴れ出しちゃうじゃないか。

「これ以上何か言つても聞いてくれなさそうですね。分かりました。依頼の受注、確かに承りました。お気をつけ下さい」

その声は不安に満ち溢れていたが、逝つてらっしゃいっていわれないだけいいか。もうこの作品の中じゃお約束のネタになってくるからな…

「じゃ、逝つてきます!」

お約束なら俺もやらないとな!

「洒落になってませんからヤメテ下さい!」

言われてしまった。そんなに頼りなく見えるだろうか…

へーイと、返事をして出て行く。

「え!?1人で行くんで…」

何か言っていたが聞こえない。

そう言えば今日はあの娘居なかったな…まあ朝早いからな。

さて準備を整えてワーム倒しに行きますか！

待ってるよセレン。良いもんプレゼントしてやっからな！

18 なんか、再戦するみたいです（後書き）

次回予告

潤「さあ、セレンには何をプレゼントしようかな。さつさとワーム倒してセレンの笑顔を取り戻してやるぜ！え？元はと言えばお前が悪い？まあそう言わずに…」

19 なんか、科学的です(前書き)

作者が初登場を果たします。

19 なんか、科学的です

さて問題です。俺は今何処にいるでしょうか？

- 1 山の中
- 2 焼け野原
- 3 ワームの前

正解は…全部です！

そうなった経緯は至極簡単。回想をするまでもないね！

山登り ワームを見つけ 焼け野原

ほら、五七五に収まった。え？説明になってない？

そのまんま何だけどな。準備整えて山に登ったら、運良くワームを見つけて、森が邪魔だったから魔法で焼き払った。魔物愛護団体の次は自然愛護団体に怒られそうだけどな。

さて、さつきも言ったが俺の目の前には討伐対象のワームがいる。前回戦ったワームより一回り小さいが、大きいことには変わりがない。それに何か黒い。真っ黒だ。・・・日焼けしたのかな？そんなわけないか。

「お前に恨みはないが、コッチも仕事なんでね…死んでもらうぞ」
悪役になってる？いやいや、人間の悪いこと言わないで下さいよ。前も言ったけど俺は善良な一般市民だから。

そんな事を思いながら俺は身体能力強化をかける。

「そろそろ技の名前でも付けるか、いちいち長つたらしいし」
そして既にテンプレになってきてる魔力の黒刀を生成する。

「準備も出来たし、いくぜっ！」

そう言っっていっしゅ…刹那のうちにワームまで間合いを詰める。

・別に一瞬を刹那と言ったことに深い意味はない。

「ハアアッ！」

と気合いを入れて10太刀くらいワームに浴びせる。しかし、

キキキキンツ！と、金属質な音がして、ワームの身体に傷つけることは出来なかった。

「情報通りだな。山で育ったようなワームは硬い鉱物を食物としていて、身体がダイヤモンドのように硬くなってらしい」

はて、誰に向けての説明口調だったんだろう。

「ならっ、黒鴉っ！」

またまた説明しよう。黒鴉とは以前のビッグリザード戦の時、刀に魔力を溜めて放った技の名前だ。形状が翼を広げた鴉が敵に突っ込んで行くように見えるから、今名付けた。

ギンツ！というさつきとは違う音が響いた。ワームの表面に刀傷みたいな痕があるところを見るに、少しは効いたようだ。

さて、次は…と考えていると、ヤツは口を開けて俺に岩を吐き出してきた。

（この攻撃はっ！）

何か見覚えのある攻撃方法だ。みんなも気づいただろ？俺を瀕死に追いやった原因となったワームの連続技だ。

飛んでくる岩の配置は俺が右へ逃げるようにそこだけ岩が飛んできて

いなかった。

（同じ攻撃は食らわねえよ！）

と、俺は避けることはせず、

「黒鴉！」

で自分に当たる岩だけを砕き即座に

「貫け天雷！サンダーボイル！続いてっ、切り裂きの風刃！テクノ

ウィンド！」

と、2つの魔法を放った。サンダーボイルは真っ直ぐにワームに向かい、テクノウィンドは対象をサンダーボイルに設定し、雷の弾丸に風の刃を纏わせた。

流石にこれだけの魔法には耐えられなかったか、ワームの身体を貫通する。

・・・ヤツは中も黒い石みたいなので出来ているのか。よし、実験の時間だ。

「狂気に乱舞しな！テクノウィンド！まだまだ！テクノウィンド！テクノウィンド！テクノウィンド！」

詠唱が毎回変わるのは気にしないでほしい：なんせその時に思いついた言葉を言ってるだけなんだから：大事なのはイメージなんです。イメージ。大切な事なので2回言いました。

ああ、俺が何したかなんだけど、ワームの体内をテクノウィンドで粉々にしています。粉々にアンダーライン、ここ重要。

そんな事出来んのかって？さつきワームに穴あけた時の傷痕から掘り進んでるから出来ちゃうんだな。

・・・さて、そろそろかな。

「仕上げのファイヤー！」

と、ワームの体内にファイヤーを唱える。最早詠唱してないって？馬鹿言っちゃいけませんよ。ちゃんと仕上げのって詠唱したじゃないですか。

ドガンッ！！！！！！

という音と共にワームの身体はバラバラになった。

何をしたのかって？じゃあ科学の授業をしてあげましょう。え？そこまで聞きたくない？え、ちよ、お願いですから聞いて下さい。

『炭塵爆発』って知ってる？まあ、粉塵爆発の一種なんだけど、炭の粒が舞い上がっているところに種火を注ぐと大爆発が起こる現象のこと。比表面積、つまり体積に対する表面積の・・・（長くなりそうなので暫くお待ち下さい）・・・っていう事。みんなも粉塵爆発には気を付けような？

後は何故あのワームの身体が炭で出来ているか気付いたかだけでも、ヤツの身体が黒かったことが一点。事前に調べた情報にダイヤモンドのように、って書いてあったからな。もしかしたら炭素を多量に含んでいて、炭素の結合が頑丈だったからじゃないか？って思ってるね。そもそも炭素っていう物質は・・・（長くなります。度々申し訳ありません）・・・という訳。

おっと、話し込みすぎて暗くなり始めちゃったな…

って、俺は10時間くらい話し続けてたのか！やべっ、セレンに謝んなきゃいけないのに。

という事で、吹っ飛んでしまったワームの触角を探すのに更に1時間かかって、15秒で下山し、村へと戻った。

潤が下山した後の焼け野原にて、

「はい。あの力は我が国に多大な利益をもたらすかと…はい。では引き続き羽山 潤という異世界人を監視します」

という何者かの無線での通信を知る者は、恐らく私（作者）だけだろう。

19 なんか、科学的です（後書き）

次回予告

潤「よし、セレンにプレゼントする分のお金が稼げたぞ！あとは報告してお金貰って品を買っただけだ！どんな物を贈れば喜ぶだろうか」

20 なんか、不穏な空気が（前書き）

短いです。

勉強が調子良くいったらもう1話投稿するかもしれません。

20 なんか、不穏な空気が

ジーニアスワームの触角を持ってギルドの中にはいると、信じられないというような顔でギルド内に居る者全員が見てきた。

「……止めてくれよ。そんな目で見られると、興奮しちゃうだろ！え？お前のキャラじゃない？じゃ、やめます。」

「はい、ジーニアスワーム、倒して来ましたよ」
そう言っただけで触角を受付の机の上に置く。

「え！？ほ、本当にあなた1人で倒したんですか！？」

失礼な、とは思わない。初級冒険者が、それもこの村に来てまだ日の浅い新人があんなデカブツを倒せたなんて夢にも思わないだろうからな。

「はい、1人で倒しました。それと…今日は疲れたのでもう帰ろうと思うので報酬の方を…」

帰るといっただけだが、この後に買い物をする必要はないので早いと報酬を貰いたいのは本当だ。

それにしても、自分から報酬の要求なんて、悪いことしてるわけじゃないんだけど気が引けるな…

「す、すみませんでした。これが依頼の報酬、30000ワロになります」

そう言っただけで、お金の入った袋を俺に渡す。

お金も受け取ったし、早いと退散するつもりですか。

「ありがとうございます。では、」
そうして俺はそそくさとギルドを後にした。

さて、今俺は露天商の前にいる。本当は宝石店でセレンに何か買おうと思ったのだが、ここを通った時に何か心揺さぶれるものがあった。

「よう兄ちゃん。何かめぼしい物はあったかい？」

と露天商が言う。

何に俺は心揺さぶれたのだろうか…このブレスレットか？違うな。このネックレスか？いや、これも違う。ウーン…

と悩んでいると、ふと宝石の付いていないタイプの指輪が目に残った。あれだな…

「この指輪が気になるんですけど、いくらですか？」

見た目はシンプルなのに安っぽくなく、宝石も付いていないので戦いやすいだろう。

「この指輪は掘り出し物でな、何でも古代の遺跡から発掘されたらしい。魔法も付加されているんだが、生憎魔法の知識はさっぱりでな。良いもんには間違いないって事で15000ワロでどうだ？」

15000ワロか、日本円で15万円か。安くはないが今はワームを倒したお金があるからな。買いだろう。

「分かりました。15000ワロですね。どうぞ」と言つて袋から15000ワロを出す。

「はいよ。毎度あり！また頼むよ！」

と言われ、指輪を渡された。

さて、帰るかな。

ということ、宿屋の二階、セレンの部屋の前へとやってきた。

今日はセレンを見ていないが、この時間ならギルドで依頼を受けてても帰って来てるだろう。

「セレン？潤だけど。セレ

ン？居ないのかな…」

そう思いつつ、何気なくドアノブを捻った。するとドアは開いた。いや、開いてしまったと言うべきか…セレンは用心深くて鍵のかけ忘れなど見たこと無い。そんなセレンが鍵を開けっ放しで中に居ないとなると、

「部屋が荒れてるな…」

別に部屋がきたないとかって意味ではない。誰かと争った形跡が

あるという事だ。何かいやな予感がする。

読者の皆さんには申し訳ないが暫く俺が俺らしくないかもしれないが、嫌わなideくれよ？

つまりはスーパーシリアスタイムに突入だ。シリアルじゃないぞ？え？分かつてる？さいですか。

そこで俺は机の上に紙が置いてあることに気付いた。

「どれどれ？」

《登城願》

手紙での願い出となつてしまったことを失礼する。この手紙を読んでいるのは羽山 潤殿とお見受けする。

用件を率直に言おう。貴殿の力にユリナント国国王は大変興味をお持ちになられた。ぜひその力を我が国のために使つてほしいと思われている。

貴殿には1度国王に会つて戴きたい。尚、貴殿の連れには先に登城してもらつている。貴殿の賢明な判断を期待する。

らしい。ふざけやがって、セレンは人質つてか？俺は仲間が危険にさらされるのが一番嫌いだっていうのに…国王はよっぽど俺の気分を害したらしいなあ。

ああ、行つてやるさ城に。きつちり落とし前つけるためにも、何故俺のフルネーム、しかも本名を知つてるのか気になるしな。そして何より、セレンを取り戻しに…

そして俺はいつの間にか燃えて灰になつた登城願という名の脅迫状をゴミ箱に入れて部屋を出て行つた。

20 なんか、不穏な空気が（後書き）

次回予告

潤「ああ、腹立たしいな。国王に対しては勿論だが、それ以上に仲間1人守れやしない俺自身に何より腹が立つ。今回はギャグは一切無いので悪しからず。今の内に1回やるとくか。・・・ふ、布団が吹つとんだ。

・・・悪かったな！寒いオヤジギャグで！」

21 なんか、悪魔らしいです(前書き)

何とか2話目投稿

21 なんか、悪魔らしいです

「ここが王都ユリナントか…」

俺は村の人に王都の方角を教えてもらい、身体能力強化を使って1時間程走って王都に着いた。

石造りの街は、王都だけあってかなり活気があった。

「んでもってあれが城と」

街の中心には一際大きく、豪華な建造物がある。

「早速乗り込みたいところだけど、顔は見られない方が良いな…」
という事で近くの店で翁の能面のような面を買い、早速着けた。
顔が知られているという可能性があるが、念の為というヤツだ。
「さて、行くか」

「ここはユリナント城であるぞ。怪しい面を着けおって、何者だ！」
あの後、俺は城へ向かって今門番に足止めを食らっている。

「俺は羽山 潤だ。話は聞いているだろう？」

「貴様が羽山 潤か。確かにその珍しい黒髪も一致するな。よし、
通れ。城の中に案内がいる」

しまった！黒髪はこっちじゃ珍しいんだった。これじゃ後で染めない
と駄目だな。

「了解した」

そう言って、俺は城の中へと入っていった。

「あなたが羽山様ですね。それでは謁見の間へと案内させていただきます。
きます。それと、王にお会いになるのですから、その面はお外し下さい」

「悪いが外せない理由があつてな、外す事は出来ない」

そう案内役の爺さんに言われたが俺は拒否した。髪の毛くらいで

計画を変更するわけにはいかない。

「絶対に失礼をはたらかないと誓うというのなら許可しましょう」
爺さんがため息をつきながら言うてきたので、

「分かった」
と返した。

「この先が謁見の間です。くれぐれも王に失礼の無いように」

再度俺に釘を差して、爺さんは扉の奥へと消えていった。

それにしても無駄に豪華な扉だ。この扉を売るだけで何人の人が救われることか…

「こんな事考えてても時間の無駄だな」

そして俺は扉を開けて謁見の間とやらに入ってしまった。

「面を上げよ」

60歳を越えたくらいの外見の王にそう言われて俺は顔を王に向ける。今俺は片膝をつき右手を左胸に当てるといふ相手に敬意を表す格好をしている。形だけだな。

「大臣から話は聞いた。やむを得ない事情があるそうじゃから面を着けての謁見を許そう」

「ありがとうございます」

ホントはこれっぽっちも感謝してないがな

「今日そなたを登城させたのは、他でもない。ワシがそなたの…」

「そんな事よりセレ…連れはどこですか？」

王のお言葉を妨げるなんて！というような声が聞こえるが無視する。

すると王は、よいよいと取り巻きを落ち着かせ、

「そなたの連れは無事じゃ、ほれ」

そう言つて王は兵士に顎で指示した。すると兵士はセレンを連れてきた。首に剣を突き付けながら。その光景は俺の理性を吹き飛ばすには十分過ぎた。

「てめえ、どういうつもりだ？」

「さて、やっと本題じゃ。今日そなたを登城させた理由。それはそなたをこの国のために利用することじゃ。断るとは言わせんぞ。この娘が死ぬことになるからの」

王がとやかく言っている間に俺はセレンとアイコンタクトをする。良かった、面をしていたが通じてるようだ。

んじゃ、俺も行動を起こしますか。

「断る。そんな役立たず、俺の手で殺してやる。闇針っ！」

そう言っただ俺は技を繰り出す。新技闇針は、俺の魔力を針状にして対象を貫く技だ。今回俺は闇針を2本使い、1本目を俺の手からセレンの腹の直前、2本目をセレンの背中から発動させることによつてセレンに貫通させたように見せかけた。

セレンも口の中を歯で切つて血を出し、如何にも吐血しましたっで感じて倒れた。良い演技だ。

「な！？貴様、気でも狂つたか！？仲間を殺すとは！」

王や謁見の間に居る者全員が驚きを隠せずにいた。

「これで足を引っ張る奴もいなくなった。思いつ切りいくぜ！」

「ク、クソ！お前たち、何をしておる！サッサとこの化け物を殺さんか！」

王がそう指示すると兵士が王を守るように俺の前に立ちほだかつた。

そんなに固まってるよ、

「黒鴉！」

の格好の獲物だぜ？

俺の黒刀から出る黒い魔力の波動が兵士たちの命を残さず刈り取る。

後は王だけだな。

「な！？闇魔術じゃと！？そなた、悪魔か！？」

「何の事やらさっぱりだな。お前に聞きたいことがある」

「な、何じゃ？答えるから命だけはたす…」

「何で俺の本名をしってる？」

これが一番の疑問点だ。セレン以外に俺の本名を知ってる人間は居ない。セレンもそうペラペラとは喋らないだろうしな。

「ウイスニルという旅をしておる呪術師がそう予言したのじゃ」

「そいつは何て言った？」

「羽山 潤という異世界人がこの国に現れ、圧倒的な力を以てこの国を大きく変えるだろう。と言っておった」

「そうか。じゃ、次の質問だ。さつき俺の事を悪魔と言ったな？それはどういうことだ？」

「その魔力の事じゃよ。闇魔術を使える者は悪魔の血を引いている。今はもう世界に数人居るか居ないかじゃがな」

「そうか、分かった」

「じよ、情報を渡したのだから見逃してくれ！」

「そうしても良かったんだがな、お前は俺の仲間を人質にとった。

これは俺の中じゃ万死に値する」

「な、何をぬけぬけと！仲間は貴様が殺したのではないか！」

「まだ分からないか。セレン」

そう呼びかけるとセレンが起き上がった。

「何よ。私を置いて依頼に行っちゃった悪魔さん」

・・・大分ご機嫌斜めだ。

「そう拗ねるなよ。ちゃんと助けにも来ただろ？」

「遅いのよ！全く」

そんなやりとりを王は信じられないといった顔で見ている。

「セレン、こいつに何かされたか？」

「私の身体をペタペタと触ってきたわ。殴り返したけど」

セレンの容姿は上の上だからな。

「そいつは良くないな。何かセレンが男に触られたってだけで腹が立ってきた。やっぱり許せないわ。じゃあな」

俺はそう言っつて黒刀を王に振り下ろした。

「さて、行くか。セレン？」

俺はセレンが真つ赤な顔で立ち尽くしている。何か言っつたっけ？

「私がジユン以外の男に触られるとジユンは腹立たしい？」

う、そこか：何だか俺まで顔が赤くなつてきた気がする。

「ま、まあな。さ、サツサと行くぞ」

俺すんげ〜しどもどろ。

いつもと態度が逆転してるな。これは良くない。

「フフツ」

そう言っつて小悪魔的な笑みを浮かべるセレン。お前だつてある意味悪魔じゃねえか。

そんな事を思いながら帰路につこうとしている俺たちであった。

21 なんか、悪魔らしいです（後書き）

次回予告

潤「最近セレンがツンデレじゃなくなってきたる…まあ、素直になつてくれるのは嬉しいんだけど。さて、次回は城を出てどっか行きます。そうだ！指輪わたさねえと！」

22 なんか、恐いです(前書き)

スカイツリーは634メートル。
すみません。意味はありません。

22 なんか、恐いです

何か前回いい感じで終わってしまって、まだ城に居たことをすっかり失念してしまっていた羽山 潤です。あ、そうそう、失念って108個ある煩惱の1つなんだよ？やったね。コンプリートまであと107個だ。え？別に興味ない？さいですか。

それにしても、

「今日初めて人を殺しちゃったけど…不思議と平気なもんだな」

「ジュンの世界では、人は死ななかつたの？」

「少なくとも俺の周りではな」

「そう…誰かを守る為だったりする時は人を殺す事も仕方ない事だと思っわ」

「そうだな」

そうは言うものの、あまり慣れない方が良く決めてる。気を付けないとな。

「さて、城を出るか」

兵士がゾロゾロと出てこられても面倒だからな。

「出るって、どうやって出んのよ」

「そりゃ、正面から？」

そう言つとセレンはあからさまに溜め息をついて、

「あんたバカ？そんな血まみれな格好で出してもらえるわけないでしょ」

と返してきた。今俺は王の返り血で服が赤黒くなっている。

じゃあ、どうするか。魔法使つて壁突き破って行くか？いや、音で兵士たちが寄つてきそうだしな。

音？うーん、やってみるか。

「セレン、倒れてる兵士の剣を3本抜いて2を詠唱の間の入口に刺して、1本は護身にセレンが持つといて」

セレンは今戦う手段がないからな。

「分かったけど、何をするつもり？」

「ちよつと科学の実験をな」

後ろで科学？何それ。という声が聞こえるが気にしない。魔法中心のこの世界では、科学なんて栄えてこなかったのだろう。

「まず、氷塊よ！アイス！」

そう詠唱して、剣を刺した場所辺りに氷塊を作る。

「続けて、炎球よ！ファイヤー！」

続けて詠唱し、氷塊を溶かして水にする。

「そして、雷光よ！サンダー！」

最後に剣に向かってサンダーを打つ。何をしようとしてるか分かった人も居ると思うが、今俺は水を電気分解して水素と酸素を作り出した。水素つてのは可燃性で爆発を起こす。酸素も助燃性で火には相性が良いからな。

「仕上げの、燃えちまえ！ファイヤー！」

バーンツと大音響をさせて火に触れた水素が爆発をする。出来るもんだな。

「よし、直ぐに兵士たちが来るだろ。セレン、逃げるぞ」

「な、何で急に爆発したの？」

と、謁見の間の入口を呆然と見ている。ダメだ。完全に惚けてる。「ちよつと失礼」

そう言っただけ俺はセレンを片手で抱き上げる。もう片方はまだ役目が残ってるからな。

「ちょ、あんた何してるによよ！」

真っ赤な顔をこちらに向けて言ってきた。

・・・噛んだことはスルーすべきなんだろうか。まあいいや。

「脱出するんでちよつと大人しくしてくれよ？」

返答を待たずに強化しっぱなしの脚で思いつ切りジャンプする。

そろそろ1階に兵士たちが集まってくる頃だからな。2階は人が少なくなってるハズ。

そう思いつつ、迫ってきた天井を右手に持った黒刀で切り裂き穴をあける。気分は斬鉄剣を持った某怪盗の仲間である。

そのまま2階、3階、4階・・・11階、12階の天井を……って、何階まであんだよ!!

と思っていたら15階の天井で最後だったらしく、屋根に出る。下を見ると兵士が王のもとに集まっている。

前を見ると、この国を一望できるくらいの高さらしく、カラコルの街のどでかいギルドと見える。あ、そうそう、実は俺って・・・高所恐怖症なんだよおお！めっさ恐れ！脚がガクガクする〜！

「セ、セ、セ、セレンさん？じ、実は俺、恐所高怖症、じゃねえや、高所恐怖症なんですよよ。ちょっと一旦しばしの間、お、降りて戴いてもよ、よろしいですませんか？」

「あんだ、何言ってるか分かんないわよ。いいから早く降りなさいよ」

セレンが言ってくる。わ、わりゆかったな。何言ってるか分かんなくゆて。めちゃくちや噛みまくったが、き、気にしないでくれ。

「い、いや、だからセレンが一旦降りて下さい。お願いします」

そこでセレンは何か気付いたような顔をした。

「ああ、もしかしてジユン高い所こわ・・・」

「言わないでえ！お願いだからそれ以上言わないでえ！」

と、恥も外聞もなく叫んだ。(潤の口調がウザいので、ここからは普通の口調に吹き替えさせていただきます)

誰にだって言われたくないことの7つや8つあるんだよ！大分多い？俺はこれでも足りないがな！

まあ、とりあえずセレンが降りてくれた。

「で、どうやって降りる気なの？」

セレンが聞いてくる。

「そりゃ勿論、城での騒ぎが収まって俺たちの事が忘れ去られた頃

に……」

「そんなの何年掛かるか分からないじゃない！」

良いじゃないか別に。せっかちな奴だな。

「じゃあセレンは何か意見ある？」

「そうねえ、こんなのどう？」

そう言っつてセレンが俺に近づいて来る。

なんだ、その笑みは。ま、まさかお前……

「逝ってらっしやい」

俺を突き落とすやがった……！しかもこの小説で初の音符をあんなに使いやがって……。後お馴染み過ぎて忘れるところだったけど誤字……！！しつけ……よ、そのネタ！

「この悪魔……！！」

と、俺はだんだんと遠ざかるセレンに向かって叫んだ。

悪魔はあんたなんでしょ？と、声が聞こえた気がしたが、それは気のせい……たら気のせい。

22 なんか、恐いです(後書き)

次回予告

潤「あああゝ！！！！！！！落ちてる！俺落ちてるゝ！！次回予告どころじゃないよ！落ちてるよ今！うわうわうわゝ！！！！」

23 なんか、何事もありません？（前書き）

何とか2回目の投稿

ちょっと急ぎです

23 なんか、何事もありません？

落ちる。墮ちる。墜ちる。空間的に、また精神的に上にあつたものが突然下に位置が変わることを言う。なら上という概念を無くせばいいんじゃないか？俺はそう思う。上を無くせば下も無くなる。みんなハッピーじゃないか。

つまり俺が何を言いたいかというと、

「誰だこんな高い城建てた奴〜！！」

うん。高い建物良くない。高所恐怖症に対するイジメかつ！イジメ、カツコワルイ。

にしても、落下しすぎじゃね？かれこれ20秒位落ちてるぞ！そんなに俺を恐怖のどん底に突き落としたいの！？いや、実際落ちてるけどさ、2通りの意味で…

城の高さが100メートル位だったから…約4.5秒か。随分長い4.5秒だなあ作者さんよお。お前のせいだつて事は分かつてんだよ！元に戻しやが…うぐ。

作者の野郎、急に戻しやがつて…舌嚙んじやつたじゃねえか。

ん？そついや俺の脚の下に地面がある。いや、さつきからあつたけど、触れてるつて意味でな。今回は作者に感謝すべきだな。助かつたぜ。全く、毎回こつやつて助けてくれれば俺だつて作者に…

「ジュン！ちゃんと受け止めなさいよ〜！」

ん？何処からか声が聞こえるが…つて上か！？

上から誰か…つてあれはセレンか！？もう魔法も間に合わねえ！こつなつたら…気合いだ！とりあえず邪魔だから面を外そう。今は誰も見てないしな…

4.5秒のフライトを終え、セレンが俺のもとへ飛んでくる。俺の計算が正しければ、セレンは44キロのスピードで落ちてきてくる。

うん。無理だ。．．．いやいや、諦めるな、俺。誰もが1度は憧れるお姫様キヤッチのチャンスだぞ！やってやる、やってやるうじやねえか。

「よっこらせつとー！」

結果を言うと、普通に成功しました。

「つてかセレン。お前思った以上に軽いな」

するとセレンから殺意が…つて何で？俺褒めたよね！？タブーつて重いつて単語だけじゃないの！？

「悪かったわね。“思った以上に”軽くて、そんなに重く見えるのかしら？」

見たこともないような素敵な笑顔でこちらを見てくる。ま、魔王だ…悪魔なんてもんじゃねえ、魔王がいらっしやる。

「い、いや、そんなつもりは無かったんだ。落ちてきたときの衝撃があまりにも軽かったから…40キロ位しか無いんじゃないか？ハハハハ」

笑つて誤魔化そうとする俺。対して、

「私は…：私は38キロよー！！！」

涙目になり、今にも泣き出しそうになつてるセレン。

つてかセレン。38キロつてどういう事だ？160センチ位身長もあつて、胸だつて一応はあるのに…うぐん、人体の神秘だ。

つて、こんな事考えてる場合じゃなかった！

「セ、セレン？お前にプレゼントがあるんだけど」

とりあえず話題変更。指輪もわたせて一石二鳥つてな。

「にゃによ〜」

涙目&上目遣いは反則だつて前にも言っただろ！審判！ちゃんと反則とれよ！

「この前セレンを置いてギルドに行った日さ、実はセレンにプレゼントをしようと思つてたんだ」

「……………」

無言、か。拒否らないつてことは興味があるのかな？

「目、瞑っててくれるか？」

「は、速くしてよね！」

そう言うのとセレンは大人しく目を閉じた。

さて、どの指に指輪をはめるか。セレンは右手に滑り止めの革手袋（指先が出るタイプ）をしているので無理だな。指輪に合いそうな指は…薬指か。テンプレな展開になりそうだが致し方あるまい。

「いいぞ、目を開けて」

セレンは目を開けて自分の左薬指を見て顔を真っ赤に染めた。あの反応は、やっぱりそういう意味があるのか。

「ジュ、ジュン！これ本気？」

？ よくは分からないがここはとりあえず、

「ああ、本気だ。セレン、左薬指に指輪をはめる意味分かってるか？」

自分は如何にも知ってます。って感じでセレンに聞く。

「『あなた以外の女性には興味がありません。もし私が他の女性を一瞬でも見たならあなたは私を罰して下さい』って意味よね？」

重おおおおいつ！！俺が思った100倍は重いわ！この世界はどんだけ浮気が嫌いなんだよ！

「え？あ、いや…俺の世界では、『あなたとずっと一緒に居たいです』みたいな意味なんだが」

するとセレンは湯気が出そうなほど更に顔を赤くして、

「ずっと一緒について…ば、ばかっ！何言ってるのよ！」

と言って先に歩いていってしまった。

村に帰るまで左手をチラチラと見ていたので、一応気に入ってくれたんだろうか…

「そういえば、結局あの指輪に掛かっている魔法は何だったんだろうっ？」

そんなことを考えながら俺は帰路についた。

23 なんか、何事もありません？（後書き）

次回予告

潤「いいんじゃないか？偶には平和な回があっても。俺が落下して
るシーンは命懸けだったかな…え？そうでもない？まあ、作者がな
んかしたからな。さて、今回はとりあえず村に戻るぜ！ま、直ぐに
俺たちはお尋ね者になるだろうけどな」

24 なんか、国を出ます(前書き)

なんとか1話投稿
遅くなりました

24 なんか、国を出ます

って事で、帰ってきましたキルファ村。といつてもすぐに出るつもりだけどね。

「セレン、分かっているとは思いますが俺たちはもうこの村、いや、この国を出るからな。準備とかは早いとこしといてね」

「分かった。出発は何時なの？」

「そうだな。早い方が良いけど、お互い準備があるからな…明日の朝10時に村入り口でどう？」

ちなみに今は夜の10時頃だ。セレンを助けに行つたのも6時頃だったからな。

「分かったわ。それまでは自由行動って事でいいの？」

「ああ。そのつもりだ」

俺も調べたい事があるからな…

じゃまた明日。と、俺とセレンは別れた。

さて、まずはギルドに行くか。

「すみませ〜ん」

俺はギルドで受付のお姉さんと呼ぶ。

「はい、どうしました？」

奥からお姉さんが出て来た。俺がギルドに来た理由、それは

「あの〜、この前カリーに付き纏われてた女の子ですけど…」

「ああ、あなたがナンパしてたあの方ですね？」

あの方？随分丁寧だな。

「ナンパじゃないけど…今あの娘何処にいるか知ってます？」

「あの方は今朝、どこかに旅に出ると仰っていました」

あれ？仲間になるフラグじゃなかったの？まあ、いいや。それにしても、

「さつきからあの方って言ってますけど、偉い人なんですか？」

「え！？あの方を知らないんですか！？まあ、ならナンパしてたのも領けるか……」

だから誰なんだよ。

「で、誰なんです？」

俺がそう急かすと、

「あの方はウイスニル様です。呪術師であり、プロミネントギルダ―でもある、未来視のウイスニルです」

こんな所で意外な名前が出たな。王を唆した奴か。あれは仲間フラグじゃなく、何か別のフラグだったのか。何かガツクリだな。

って、あの娘プロミネントギルダ―だったのかよ！俺がジーニアスワーム倒さなくても良かったじゃん！

「へへ、有名人だったんだな」

と言って俺は受付から離れた。

俺はあの後、今後の安全の為にプロミネントギルダ―について調べる事にした。敵対したときは逃げなきゃならないからな……

「プロミネントギルダ―、プロミネントギルダ―っ」と

そう思い、俺はギルドの資料を物色しだした。

「おっ、あったあった。これだな」

《最新版 プロミネントギルダ―》

プロミネントギルダ―とは数いるギルダ―の中でも、その名の通り突出した実力を持つ10人のギルダ―を指す。プロミネントギルダ―はいずれも国に所属しているが、国内を旅しているため所在地不明。現在のプロミネントギルダ―は、

- ・ 最聖賢 アレス
- ・ 守砦壁 ヘクト
- ・ 未来視 ウイスニル
- ・ 悪魔殺し テナ
- ・ 時操師 クラン
- ・ 大気使い シニフ
- ・ 瞬息剣 シリチナ
- ・ 魔天剣 クラウ

・邪神王 サナトス ・獣懐狼 ノルティ
の10人で構成されている。

ここまで読んで感想を1つ…厨二かつ！何で二つ名が付いてんだよ！

「俺は悪魔殺しって奴だけは会っちゃだめだな」

俺悪魔らしいし。出来れば邪神王なんてヤバそうな奴にも会いたくない。ってかプロミネントギルダーには誰にも会いたくない。あれ？これフラグ立つちゃった？

「まあ、プロミネントギルダーについてはこんなもんでいいだろ」

ギルドを出た俺は不意に立ち止まり、

(おい、KY女神、久しぶりの出番だぞ)

(まったくだよ！11話ぶりの登場のヒロインなんて普通じゃないよ！)

11話ぶりの登場か…

…もういらなくね？作者に頼んで今度消して…

(そこっ！！不穏な事考えない！)

見透かされてたか。ってか、

(KY女神、お前はヒロインだったのか!?)

(何で今知りましたみたいない顔してんのよ！最初に出会った女の子じゃない！)

(いや、それだけでヒロインにはなれないと思うぞ？ってか読者の皆さんもヒロインはセレンだけだと思ってるだろうし)

(フッフ、そうか、あの娘が全部いけないんだね。あの娘さえいなければ、あの娘さえいなければ…)

(今更ヤンデレは無理があるぞ)

(やだやだ！ヒロインがいい、ヒロインがいい！)

(駄々をこねるな！お前女神とか名乗ってるけどただの中学生だ

る！）」

（「ううん。今年で6753歳だよ？」）

（「だいぶいつてる！！その割に精神年齢低っ！！」）

（「失礼ね、人間に換算するとまだ15歳だよ」）

（「余裕で1万歳を超える予感っ！！って、こんな事話すために呼んだんじゃないんだよ。俺たちはこの国を出ようと思うんだけど、どの国がいいと思う？」）

（「あのセレンって娘と相談すればいいじゃない」）

（「セレンはこの国から出たこと無さそうだったからな」）

（「うーん、私個人としてはレーテルンへ行っってほしいところだけど、運命の女神はハリンテへ行けっって言ってる」）

（「どんな国なんだ？」）

（「レーテルンは冥府の国っって呼ばれてて、アンデットたちが…」）

（「よし、ハリンテへ行こう」）

（「まだ最後まで言ってないのに」。ハリンテは大らかな国柄からか人種差別が無く、獣人たちも多く住んでる良い所だよ？それでもいいの？）

（「いいよ！むしろ大歓迎だよ！」）

（「面白いと思うんだけどな、レーテルン。・・・あっ、仕事入っちゃったから今回はこれで」）

（「おう。俺も聞きたいことは聞いたからな」）

（「んじゃ、また呼んでね」）

そう言っであっちから切っってしまった。さて、つぎは何時になることやら。

「よし、行き先は決まっただな。じゃ、旅の準備するか」

といった感じで食料や装備を整え、明日に備えて寝る事にした。

24 なんか、国を出ます（後書き）

次回予告

潤「新しい国か…どんな所かワクワクするな！前は俺が待ち合わせに遅く来たから、次は俺が先に行くようにしないとな」

25 なんか、国を出ます(前書き)

期末テストが山場だったもので…更新遅れて申し訳ありません。

25 なんか、国を出ます

「さて、そろそろ行くか。待ち合わせは村入り口だったよな」

今は午前9時過ぎ。村入り口までは5分掛からない。ちよつと早
い気がしないでもないが、俺は前遅れたからな。

そう思いつつ俺は村入り口へと歩いていった。

「セ、セレンっ！？何でいんの!？」

そこには例の黒いローブにフードを被ったセレンが居た。現在9
時10分。どういう事？

「あんたが此処に集合って言ったから居るに決まってるでしょ？何
わけ分かんないこと言ってるの？」

「いや、そうじゃなくて…もしかして待った？」

「いいえ、5分前に来たばかりよ」

良かった。どうやらそれ程待たせていないらしい。

「そうか、待たせて悪かったな」

「い、いいのよ別に、まだ集合時間まで50分もあるから」

と言って顔を赤らめるセレン。何故赤らめる？ま、いいや。

「えーっと、今回の旅はこの国を出ようと思うってのは前に言った
よな？」

「ええ、聞いたわ」

「そこで目的地の国だけど、ハリンテへ行こうと思うけど何か意見
ある？」

「いいえ、人種差別がないような国だしこの国よりも過ごしやすい
と思うわ」

セレンはフードから出ている前髪を弄りながら言った。あ、髪染
めなきや。

「じゃ、問題も無いようだし、出発しますか」

「出発って、ハリンテが何処にあるか分かってんの？」

「……ちょっと待ってて」

(おいKY女神、2話連続で出番だぞ)

(出番? いやいよ私もヒロイン入りか認められたかな)

(そんな事、何で人が生きてるのか考える位どうでもいい。ハリンテはどっちにある?)

(とても突っ込みづらい! 重要な? どうでもいいの?)

(どうでもいい)

(あっさり切り捨てられた!)

(っつてか早く教えるよ、セレンが待つてるだろうが)

(何で不機嫌!? 原因あなただよな!? ま、いいや。ハリンテはキルファ村から西へ馬車で10日行った所に国境があるよ)

(そうか、分かった。次に出番があるか分からないけど、じゃあな)

(嫌な終わり方っ! 絶対出るからね)

「西へ馬車で10日行った所だっつて」

「だっつて、あんた誰にも聞いて無いじゃない」

「やべっ、なんて言い訳しよう。」

「……ちよつと脳内会議してた」

「その間は何なのか知りたいけど……まあ、いいわ。じゃカラコルの街に行きましょう」

「セレンと会ったあの街か。っつて、」

「キルファには無いのか?」

「キルファにあっいたらカラコルから歩いてこないわよ
ごもつとも。」

「んじゃ、カラコルに戻りますか」

カラコルまでの道のりではこれといった事も無く着いた。強いて

言うなら、巨大なもやしと戦ったり隠された遺跡見つけたり…え？
詳しく話せて？いやいや、大したことじゃないから。

「さて、カラコルに着いたわけだが、馬車は何処で乗れるんだ？」
前回来たときはギルドと図書館、武器屋しか行かなかつたからな
あ、武器屋で買ったロッド、キルファの宿屋に忘れてきた！まあ今
は黒剣が使えるからいいんだけど…

「馬車は街の北側にある馬車小屋で乗れるわ」

「今俺たちは街の南門って所にいるから正反対だな、めんどくさ。

「そっぴやセレン、プロミネントギルダって知ってる？」

「街の中を歩きながら何となく聞いてみる。」

「当たり前でしょ。この世界に居て知らない人はいないわよ。1人
1人が一国の軍隊より強大な力を持っているらしいわ」

あのウイスニルって娘もそんなに強いのか…ソロで行動するのも
頷けるな。

「そりゃ恐ろしい、出会いたくも無いな」

「一部のプロミネントギルダを除いて、国の召集がかかって戦争
をする時以外は人とは戦わないらしいから大丈夫よ」

「一部は好戦的なのか…出会ったら人生終了のお知らせだな。」

「誰がどの国に属してるかって分かるの？」

「出来れば悪魔殺しがハリンテに居ないことを祈る。割とマジで。」

「この世界には5つの国があつて、中央国家ユリナントには未来視、
冥府レーテルンには邪神王と魔天剣、商業国家マナトには最聖賢と
大気使い、バーラン共和国には守砦壁と時操師、そして自由国家ハ
リンテには悪魔殺しと瞬息剣と獣懐狼が所属しているわ」

はい。気まぐれセカンドライフ、バッドエンド決定です。ってか
俺が悪魔殺しに殺されてデッドエンドです。

「セレン、今までありがとう」

「何バカなこと言ってるの？プロミネントギルダなんてそうそう
会わないから大丈夫よ。私だってまだ会ったこと無いわ」

じゃあ神にでも祈るときですか。あ、KY女神にじゃないからそこ勘違いしないように。

「ところで、さっきからこの格好で普通に街中歩いてるけど、俺たちって指名手配とかされてないのかな？」

別に兵士を呼ばれたりもしないしな。

「多分それはこの国の政府が国民に支持されていなかったからだと
思うわ」

「なるほど、反乱でも起こされちゃたまらないって事か」

「そういうこと・・・着いたわよ。その家の中で受付を済まして、
馬車に乗れるわ」

セレンが指差した先には馬車小屋とは言えないくらい大きく、立派な家があった。

「じゃ、受付を済ましてきますか」

と言って俺たちは馬車小屋に入ってしまった。

「あの、ハリンテまで行きたいんですけど・・・」

俺は受付のおじさんに声をかけた。

「受付はあっちだ小僧」

と言って奥のお爺さんを指差した。この人受付じゃなかったのね...
ってか間違いのくだりいらなくね？作者さんよお。どうせ同じ事
言うんだから。

「あの、ハリンテまで行きたいんですけど・・・」

ほら、一言違わず変わんねえよ。

「ハリンテのどこじゃ？」

それは考えてなかった。

「とりあえず国の中心の街で」

とりあえずって...というセレンの声が聞こえるがスルー。

「ハリンガルでいいのかな？」

「はい。そこをお願いします」

合ってんのか間違ってるのか知らんがな。

「それなら1人3000ワロじゃ」

2人なんで、と言って6000ワロを渡す。だいぶ高いな…

「確かに受け取った。2番馬車があと15分が出るからそれに乗りなさい」

分かりました、と俺たちは言って、早速2番馬車に乗り込んだ。

15分後、馬車が出る時間になり、俺たちの乗った馬車は出発した。それから…え？もう終わりの時間？分かったよ。じゃ、続きはまたの時間にな。

25 なんか、国を出ます（後書き）

次回予告

潤「今回は馬車に乗ってハリンガルに向かうぜ！盗賊に襲われたりしないか今からガクガクブルブルだ。それと作者、あんまし読者の皆さんを待たせんじゃねえぞ？」

26 なんか、出会っちゃいました(前書き)

久しぶりの2話投稿

26 なんか、出会っちゃいました

・・・え？もう始まってんの？早く言ってくれよ作者ア、気付かなかつたじゃん。

さてさて、現在俺たちは馬車に乗って移動中です。因みに既に旅は6日目に入ります。前回出発したばかりじゃないかって？そりゃ昨日までの5日間は何もなかったから作者がカットしたんじゃない？ひたすら街道を走り続けてて魔物に襲われる事も無かったし…

だが俺は1つ言つてやりたい。今日何かが起こると。じゃなきゃ今日もカットされてるはずだもんな。

どうせそのうち御者が盗賊だ〜なんて言つて…

「盗賊だ〜！盗賊が来たぞ！」
ほらな。

外を見てみると、俺たちの馬車の周りを取り囲むように、馬に乗った連中10人ばかりが迫ってきた。

「盗賊を追い払う手段みたいなのってあるんですか？」

俺は窓を開けて外で馬を操っている御者に聞いた。

「い、いや、ない。普段ここは治安が良くて魔物や盗賊の類が出ない街道だからな」

んじゃ、やるしかないのか…俺としてもサッサとハリンガルに着きたいからな〜

「そうですね。俺とそこにいるセレんって女の子は冒険者なんで、戦いますよ。ただ、危険ですので馬車の荷台に入って、窓から外を見ないようにして下さい」

実際の所は俺の悪魔の力とやらを見られたくないからんだけどな…

「あれだけの人数を2人で大丈夫かい？」

そこには心配というより、下手に怒らせてこちらに被害が及んで

も困るといった表情があった。

「はい、ご心配無く。さ、早く荷台に入って下さい」

苦笑いを浮かべて返す俺。そんなに頼りなく見えるかな…

「分かった。頼むよ」

そう言うのと、しぶしぶといった感じで御者は馬を止め、荷台へと入って来た。それと入れ替わりで俺たちは荷台から出て屋根の上に立った。

「さて、セレン、準備はいいか？」

「いつでも大丈夫よ」

そう言いセレンは剣（城で奪ったヤツ）を構えた。

「じゃとりあえず、俺は右の5人を倒すからセレンは左の5人を」

「分かったわ」

そう言いセレンは屋根から飛び降り、左の敵へと走り出した。

「じゃ、やりますか」

とりあえず身体能力強化をかけて、黒刀を創り出す。

「んじゃ、黒鴉っ！」

俺は目の前に迫ってきた盗賊3人を殺さない程度の魔力で雑払った。

「続いて、闇針っ！」

俺の黒い魔力を見て呆然としている盗賊の1人の四肢を闇針で貫いて無力化する。あと1人か…

今俺の前には盗賊の頭と思われる2メートルを超えようかというゴツいおっさんが斧を肩に担いでいる。

この雰囲気、出来る！

・・・言ってみたかっただけなんでお気になさらず。

「俺の仲間を倒すたア、なかなか強いみたいだなア」

あ、意外に声が幼い。

「なら素直に退いてくれないか？」

「そいつは無理なお願いだ。このままじゃ俺等のメンツが保てねえ
でしょうね。斧担いでやる気満々だもん。」

セレンは・・・まだあつちで戦ってるか…援護は期待できないな。
「何ボツツとしてやがんだアアア!!」

盗賊の頭は隙を見せた俺に向かって斧を振り下ろした。

「危ねツ！」

と、ギリギリでかわす俺。攻撃が速い!

「おらぁ、まだまだ！」

いずれも急所を狙って連続で振り下ろしてくる。

なんつゝ速さだ。身体能力強化した身体で避けるのが精一杯だ…

「避けてばっかじゃ俺に当たんねえぞ！」

「分かつ、てる！」

チクシヨウ、反撃しようにも隙が…

「終わりだアア!!」

盗賊の頭が頭上から斧を振り下ろす。ヤバツ！これは避けらんね
え！

「爆散っ！」

どこからか声がして俺と盗賊の頭は吹っ飛んだ。た、助かった。
にしても誰が…

声のした方を見ると、騎士の鎧に身を包んだ人間がいた。声
からして多分男だろう。

「間に合ったか…その少年、手荒な真似をして済まなかった」

騎士は俺に向かってそう言った。どうやら俺の敵ではないようだ
な…

「てめえ、なにもんだ！」

盗賊の頭が騎士に言い放った。

「ハリンテ国宮廷騎士団長といえれば分かるかな？」

「ハリンテだと!?!?てめえ、追っ手か！」

「そういうことだ。大人しく投降してくればこちらとしても助か

るのだが」

「ふ、ふざけるなアア!!」

顔を怒りで赤くして宮廷騎士団長さんとやらに突っ込んでいく。つてか俺蚊帳の外って感じだな…主人公なのに。

「聞いてはくれないか…」

そう言つと、宮廷騎士団長は腰に差した剣を抜いた。

「ウオオオオオツ!!」

盗賊の頭が間合いに入った宮廷騎士団長を斬り殺さんと、大上段から振り下ろす。

「安心しろ、殺す程オレは下手ではない」

何のこと?と俺が思った瞬間、盗賊の頭がズタズタに切り裂かれて吹き飛んだ。

俺には剣を振つたようには見えなかったな…どういう事だ?

「ジユン!大丈夫?」

セレンの方も戦闘が終わつたようで、俺に駆け寄つてきた。

「あ、ああ、危なかつたがその宮廷騎士団長さんに助けてもらった」

未だに何したのか分からないが…

「君たち、盗賊団の逮捕に協力してくれてありがとう」

宮廷騎士団長が俺たちに礼を言ってきた。

「いえ、ハリンテに行く途中に襲われただけなんでお気になさらず」

「おお、君たちはハリンテに行くのか!オレはハリンテの宮廷騎士団長でギルダーでもあるシリチナっていうんだ。この先に馬を停めてあるんだが、よければ国まで一緒に行かないかい?」

シリチナ?どっかで聞いた名前だな…うん、思い出せん。セレンは…何か固まつてるし…

「あ、はい。是非お願いします」

これから行く国の宮廷騎士団長様の顔に泥を塗るわけにはいかな
いからな。

「そうか、来てくれるか！では行くとしよう！」
そう言って宮廷騎士団長は歩いていった。俺たちも乗ってきた馬車に断りを入れて、宮廷騎士団長について行った。

それにしても、シリチナ、シリチナ…

だいぶ復活したセレンに聞くか。

「セレン、シリチナって名前に聞き覚えない？」

するとセレンは、信じられない！という顔をして、

「兜をして顔が分からないけど、ギルダーでシリチナっていえば、プロミネントギルダーの1人、瞬息剣のシリチナでしょ！」

・・・ハハツ冗談きついで！プロミネントギルダーなんてそうそう会わないってセレン言ってたじゃん。こりゃ悪魔殺しと出会う日も遠くないな。ハハハハハツ……………はあ。

とりあえずハリンテに逝きますか…

いつもの3000分の1のテンションで歩いていく俺がそこにはいた。

26 なんか、出会っちゃいました（後書き）

次回予告

潤「次回？とりあえずハリンテ着いて城に行くんだろつな？。今から憂鬱でたまらないぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2011年12月11日17時45分発行